

映画に見る戦後日本の床坐と椅子坐の変遷(1)

石村, 眞一
九州大学大学院芸術工学研究院環境・遺産デザイン部門

林原, 泰子
九州大学総合博物館

<https://doi.org/10.15017/2794862>

出版情報：芸術工学研究. 11, pp.37-69, 2009-11-20. 九州大学大学院芸術工学研究院
バージョン：
権利関係：



映画に見る戦後日本の床坐と椅子坐の変遷 - 1

The Transitions of Floor Sitting Style and Chair Sitting Style after the Second World War through Viewing Japanese Movies - 1

石村真一

林原泰子

ISHIMURA Shinnichi

HAYASHIBARA Yasuko

Abstract

The aim of this research is to clarify the developments and changes related to the floor sitting style, chair sitting style and the co-existing floor and chair sitting style, through the daily life style scenes that occurred in movies that were produced after the Second World War. For movies that were released as DVDs, those after the year 2000 were plentiful but those that were produced after the Second World War, as a whole, were not necessarily exhaustive. However, in this research, 303 movie titles were able to be collected. These movies were arranged and grouped into a 5 year period starting from 1945, and then categorized into 3 categories namely, floor sitting style, chair sitting style and co-existing floor and chair sitting style. As a result, the floor sitting style did not follow a gradual decline but the peak of decline occurred in 2 periods, between 1965-1969 and between 1985-1989 respectively. For western-style rooms with flooring after 1989, a phenomenon in which a slight increase in floor sitting style could be observed. In Japanese lifestyle where chair sitting style had been adopted, those that were solely chair sitting style were fewer than expected. Thus, the co-existing floor and chair sitting style will increase slightly in the time to come.

1. はじめに

日本の起居様式に関する研究は、極めて幅広い分野からなされているが、西山卯三の『日本のすまい』¹⁾に代表されるような建築学からのアプローチ、沢田知子の『ユカ坐・イス坐』²⁾に代表される生活科学の住居学、デザインのインテリアからのアプローチに大別される。沢田の研究は『ユカ坐・イス坐』の副題である「起居様式にみる日本住宅のインテリア史」という視座であり、必ずしも建築の外観や構造を包括した内容ではない。

西山の研究方法は、フィールド調査を中心に住宅の類型化を基盤としながら、その住宅の生活者と階層、生業といった社会的背景も含め、間取りと生活者の関連性を追究する一環として起居様式を取り上げている。一方、沢田の研究は、文献史料とフィールド調査の両面から、異なった生活文化の接合を重視し、起居様式の進展に関する多様性を追究している。

本研究は、沢田のインテリア史という視座を踏襲し、戦後に製作された映画に見られる住宅の起居様式から、床坐と椅子坐の変遷を明らかにすることを目的とする。すなわち、戦後における椅子坐の進展と、沢田の主張する「ユカ坐回帰現象」、「和室ユカ坐」から「洋室ユカ坐」への移行の実態を、映画の具体的な生活場面を通して検証を試みるというものである。

2. 研究の方法と対象

2.1. 映画の資料的価値とその選定

映画は純粋な記録映画でない限り、一次資料とはいえない。では資料的な価値が低いかといえば、必ずしもそうとは言いきれない。雑誌の生活場面も起居様式の研究

によく使用される。ところが、こうした写真は現在に至っても、常に生活の実態というより、何かを恣意的に見せるため、演出を施していることが多い。「きれいなダイニングキッチン」「合理的なダイニングキッチン」といったイメージを想定して、撮影対象を企画し、場面を選定しているのである。

映画の演出には、地域性、階層性がことのほか強調されており、一つの特徴となっている。換言すれば雑誌の写真と比較した場合、この特徴が持つ恣意的な演出は払拭出来ないが、製作された時代、その地域の生活の示し方は精緻であって、資料価値も有する。すなわち、撮影のためのセットであっても³⁾、「大阪の貧しい下町の家庭」「東北地方における小都市の旧家」という具体的な生活表現に価値がある。

沢田の『ユカ坐・イス坐』では事例を示すことはあっても、資料を定量化した部分は殆どない。おそらく、一定の地域から、坐の様式を標本化するという手順でフィールド調査がなされていないのであろう。本研究においても、一定の地域における変遷は場面が少ないことから、地域の起居様式に関する定量化はできない。しかし、映画には大都市、地方といった多様な地域の設定がなされており、数多くの映画に登場する起居様式を抽出することにより、大都市と地方を包括する変遷を多少なりとも定量化することは可能であると考えられる。

使用した映画はすべて家庭生活を表現する場面を有するもので、5年間を一つの時代区分とし、1945～1949年-14、1950～1954年-25、1955～1959年-35、1960～1964年-43、1965～1969年-31、1970～1974年-21、1975～1979年-16、1980～1984年-18、1985～1989年-18、1990～1994年-17、1995～1999年-18、2000～2004年-24、2005～2008年-23、計303作品とした。

戦後の各5年間の作品数が均等に近いこと、または全製作映画から同じ割合で選定することが定量化を進める上では重要になる。しかし、1950年以前に製作された映画は少なく、それ以降の作品でもDVDとして販売されている映画は意外に少なく、評価の高い監督の映画、または2000年以降に上映された映画に集中している。さらに、『社長シリーズ』『若大将シリーズ』『無責任男シリーズ』『男はつらいよシリーズ』⁴⁾といった、シリーズ物として販売されているDVDが多いことから、極端に作品本数の多いシリーズは一部割愛した。それでも総じて、本研究による映画作品の選定には、やや偏りがあることは否めない。

2.2. 坐の規定

住宅内の坐については、床坐、椅子坐、床坐と椅子坐の併用の3種類とした。この3種類の坐は、次のように規定する。

- 床坐A—映画で示された住宅内の主たる部屋、または一部の部屋であっても床坐だけの生活をする。
- 椅子坐A—映画で示された住宅内の主たる部屋、または一部の部屋であっても椅子坐だけの生活をする。
- 床坐と椅子坐の併用A—映画で示された住宅内の主たる部屋、または一部の部屋であっても床坐と椅子坐の併用をする。

本研究では、ベッドの使用は坐の規定には関与しないものとする。仮に畳の部屋でベッドを使用して、椅子と同じような使用があっても、椅子坐とは規定しない。逆に病院の食事のように、ベッドの上で胡座にて食事しても、床坐とは規定しない。

以上の床坐A、椅子坐A、床坐と椅子坐の併用Aを第1の規定とする。

映画の場面で問題となるのは、住宅内のすべての部屋が示されていないことである。極端な言い方をすれば、すべて示されていないのに床坐、椅子坐の規定は出来ないという指摘もあろう。特に注意しなければならないのは、床坐と椅子坐を規定する場合で、すべての部屋を見ない限り判断が難しい。

1967年の内閣府景気統計部資料では、学習机と書机の普及率は72%、1968年は73.2%となっている⁵⁾。1980年代以降、学習机と椅子は、小学生の入学時より使用されることが多くなる。映画では示されなくとも、中学生や高校生がいる家庭では、椅子坐を併用していることはまず間違いない。また、椅子坐の場面でも、一家の主または主婦が和装の場合は、和室があると判断する必要がある。こうした点を配慮して次のような規定も加えた。

- 床坐a—床坐Aであっても、1980年代以降に製作された映画では、ワンルームでない限り、家族に小学生、中学生、高校生がいる場合は学習机と椅子を使用しているとし、床坐と椅子坐の併用aに移して残ったもの。
- 椅子坐a—椅子坐Aであっても、ワンルームでない限り、一家の主、主婦が和装の場合は和室での床坐があるものとし、床坐と椅子坐の併用aに移して残ったもの。
- 床坐と椅子坐の併用a—床坐と椅子坐の併用Aに、床坐a及び椅子坐aの規定により、床坐A、椅子坐Aより移った場面を加えたもの。

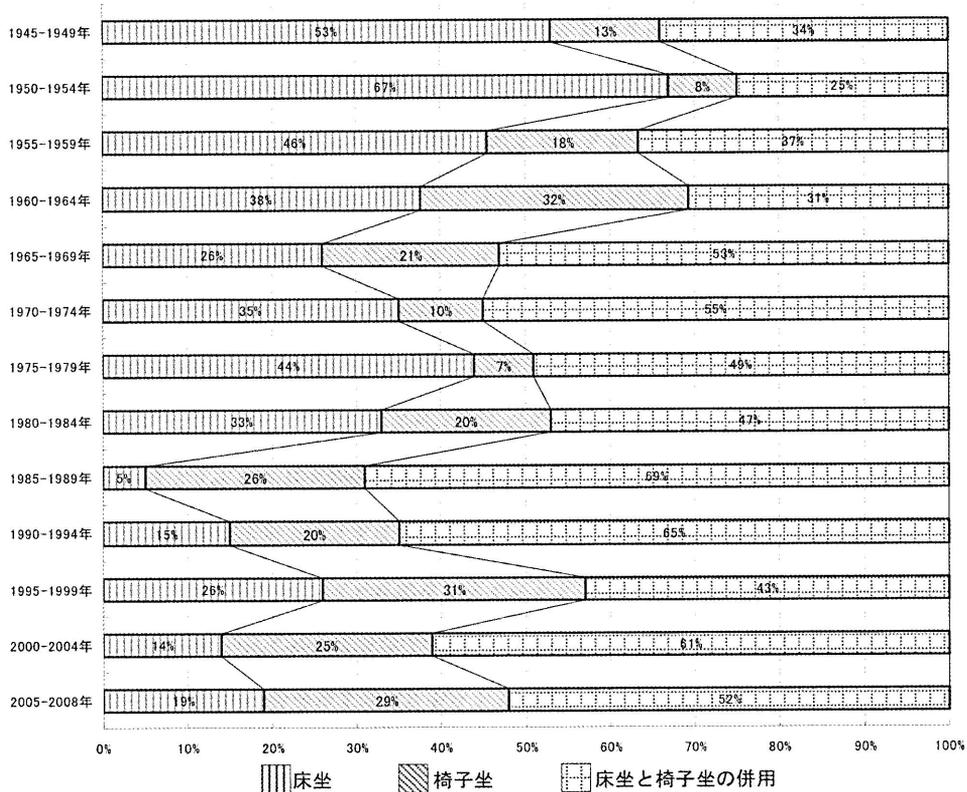


図1 映画に見られる坐の実態—第1の規定

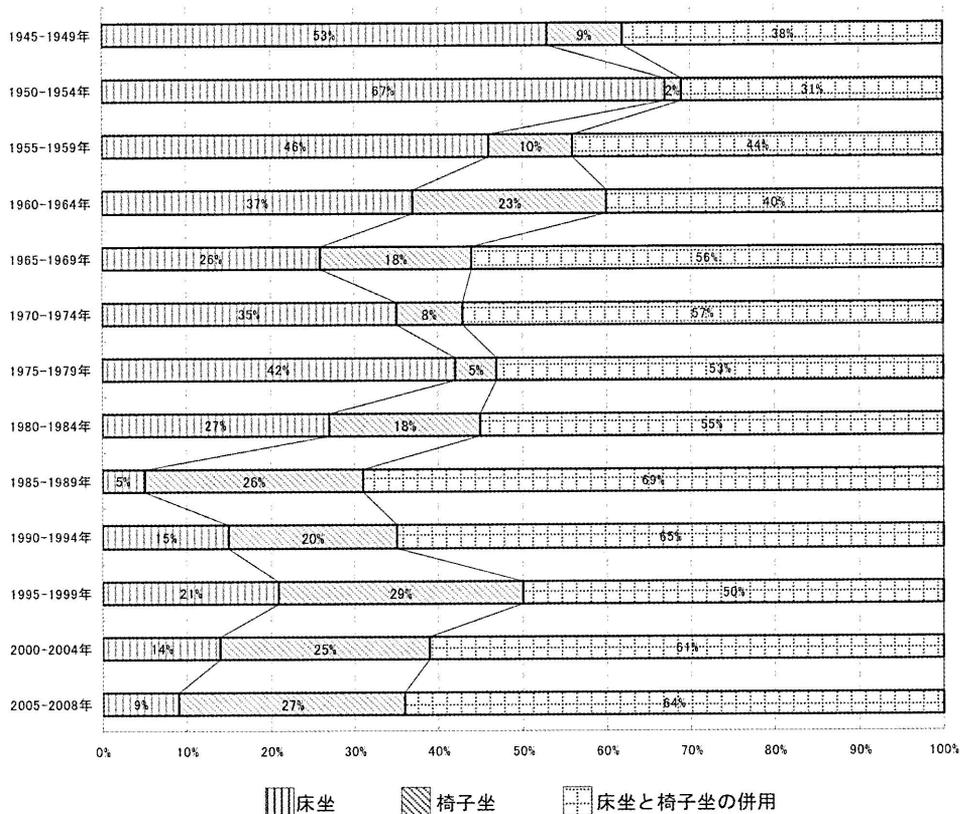


図2 映画に見られる坐の実態—第2の規定

以上の床坐 a、椅子坐 a、床坐と椅子坐の併用 a を第 2 の規定とする。

映画における住宅内のすべての部屋を示していない欠点を補うために、第 1 の規定と第 2 の規定を併用しながら戦後の起居様式の変遷を検討する。

3. 戦後の映画に見る坐の変遷に関する概要

3.1. 床坐の変遷に関する概要

303 という数の映画作品の調査結果については、第 1 の規定による調査結果を資料 1、また戦後を 5 年単位で比較した床坐、椅子坐、床坐と椅子坐の併用に関する割合は、図 1 に示した。第 2 の規定による割合については図 2 に示した。

1945～1954 年までの生活では、子供の学習机も床坐での使用が多く見られた。大都市またはその郊外の富裕層でも床坐の生活が見られ、1954 年に製作された『山の音』は、鎌倉市の生活を描写しているが、起居様式はすべて床坐である。地方の生活は、1953 年に製作された『東京物語』に見られるように、尾道市の退職したサラリーマンの家庭でも床坐であった。地方が都市に比較して床坐が多いのは間違いないが、戦前期の生活改善運動では農家でもダイニングテーブルの導入が少数あり⁶⁾、こうした場面が映画で示されていないだけである。

地方でも山間地の農村では、1955 年以前はちゃぶ台だけではなく、一部膳も使用され、床坐で足付きまな板を使用する文化も見られた⁷⁾。残念ながら、こうした生活風景を戦後の映画から見いだすことはできない。

図 1 を見る限り、床坐の割合は徐々に減少しているのではなく、1965～1969 年と 1985～1989 年という時期を減少のピークとする二つの波が存在したようである。

沢田は「ユカ坐回帰現象」が昭和 50 年代から始まると説いている⁸⁾。高度経済成長が 1970 年代前半で終わり、経済の低成長期に一旦導入した椅子坐文化を放棄した家庭は、1980 年代に発売された家具調こたつに代表されるような、床坐の文化に回帰するという捉え方自体に問題はないが、映画を通して検証した場合、そうした単調な動きとは限らないようだ。

1970～1979 年にかけて床坐が増加する動きは、沢田の「ユカ坐回帰現象」が想定する年代より 5 年以上早い。1970 年代前半は高度経済成長が未だ続いている時期である。しかし、この「ユカ坐回帰現象」は長く続かず、1985～1989 年に床坐は極端に減少する。それでも 1990 年以降微増に転じ、2005～2008 年では 9～19% まで回復する。沢

田の研究は 1995 年までの起居様式を探求したものであるため、都市の集合住宅でも「和室ユカ坐」から「洋室ユカ坐」への移行が多く見られるというまとめで終わっている⁹⁾。沢田のまとめから 14 年経過した現在、確かに「洋室ユカ坐」への移行は進展している。特に若い世代を中心とするワンルームマンション等での生活には、広く反映されている。フローリングの床でありながら、床坐で生活する様式は、1980 年代以降増加している。

1980 年以降、新築されたワンルームの賃貸住宅で、フローリングは限りなく 100% に近い。学習机で生活した高校生は、大学生や社会人になってワンルームの賃貸住宅に入居する際、親しんだ学習机を実家に置いてくる場合も多い。狭い部屋の空間を活かすには、モノを多く持ち込まないことも一つの工夫なのかもしれない。その意味では床坐は合理的な根拠を持っているといえよう。

伝統的な和風住宅と共に、古い和室のワンルームや和室の文化住宅も映画に登場することがある。この場合の和室は、フローリングに改装する費用が高いため、安い家賃で入居できるという、いわば貧乏の象徴のように示される。2007 年に製作された『赤い文化住宅の初子』は、その典型的な作品である。「和室イス坐」は衰退しても、なくなったわけではない。1954 年に製作された『どぶ』の貧困な生活と共有する精神が、床坐の生活を通して読み取れる。こうした床坐は、所得格差の広がる現代社会を投影していると言っても過言ではない。

3.2. 椅子坐の変遷に関する概要

先にも述べたように、映画から起居様式を抽出する際、椅子坐と床坐と椅子坐の併用を判別することは極めて難しい。住宅内のすべての部屋が示されていない以上、確定はできない。そのことは床坐にも言えることなのだが、椅子坐が示されている場面は、ダイニングキッチンと応接間が圧倒的に多い。この場合、居間が同時に示されていないければ、住宅内の起居様式は完全に把握することは難しい。但し、それでは映画を資料として使用すること自体が不適切となるため、本研究では敢えて示された家庭の場面だけで椅子坐を規定する方法と、一家の主、主婦が和装で椅子を使用する場面を含む作品は、床坐との併用と規定する二つの視点で臨んだ。

図 3¹⁰⁾ は 1949 年に製作された『破れ太鼓』の椅子坐である。三つの場面はいずれも完全な椅子坐を示している。ところがダイニングルームでは、板東妻三郎演じる一家の当主と妻が和服を着用している。作品の家庭内における場面では、応接室から子供部屋まですべて椅子坐であ



図3 『破れ太鼓』（1949年）

る。この映画は、娘の恋人となる画家のアトリエも含め、作品全体が椅子坐で統一されている。木下恵介監督の製作意図には、この椅子坐と1949年という設定が深く関与していた可能性がある。成り上がりの土建業の会社を営む主人公は、家庭に戻ると和服に着替える。この場合の和服は、日常生活のくつろぎを演出している。

『破れ太鼓』の場面では、和室と床坐は一切見られな

い。主人公の住む住宅は、戦前に建てられた洋風住宅を戦後に購入したように設定されている。つまり、示された各部屋の起居様式は、元々建築された時期に設定されていたことになり、起居様式全体は家族が建築に合わせていることになる。それでも主人公の妻は日常生活で大島紬を着用している。こうした和装が単に服装という意味だけなのか、和室での床坐を意味するのかは判断し難い。図2では『破れ太鼓』を床坐と椅子坐の併用としたが、和装以外に床坐の確たる論拠があるわけではない。

1947年に製作された『安城家の舞踏會』は、『破れ太鼓』の住宅とは根本的に構造が異なる。登場する大規模な住宅はいわゆる洋館で、ヨーロッパのように室内も靴を履いて生活するスタイルである。映画の内容は、旧華族の落ちぶれていく様と戦後の新しい生き方とを同時に投影させるというものである。この映画の少し後に流行語となる斜陽族の魁となった。富裕層の没落を自ら体験した新道兼人が脚本を担当している。この映画では、家族はすべて椅子座の生活をしている。しかし、女中等が使用する和室が同時に示されているので、正確には床坐と椅子坐の併用となるが、家族の起居様式を重視して椅子坐到分類した。

椅子坐を主体とする起居様式は戦前から少数存在していた。日本人が欧米文化を明治期より積極的に受け入れ、華族や政府高官はこぞって椅子坐を自邸にも導入する。こうした椅子座は、おおむね従来の住居を和館とし、接客用の洋館を新造することで対応している。この和館と洋館のセットという概念は昭和に入っても存在したようだ¹¹⁾。先の『安城家の舞踏會』では、1階部分は接客用、家族用のスペースは2階になっている。こうした形式であれば、和館はないので、使用人の部屋を除けば一見すべて椅子坐のように見えるが、実態はどうかであろうか。日本の伝統的な茶道、華道、琴等とは無縁の生活をしたとも思えないのだが、映画からは読み取れない。

1945～1954年あたりに見られる椅子坐の作品には、戦前から引き継がれた洋館を撮影したものが含まれている。マントルピースにピアノというインテリアの組み合わせは、戦前期に構築されたものである。

一方、戦後に新築した洋風建築は、経済力を誇示するステータスシンボルという役割が強い。すなわち、金持ち＝椅子坐、外国の大型自動車と運転手の雇用、外国製家庭電化製品、とりわけ大型電気冷蔵庫の使用という設定が、1955年以降の作品にしばしば認められる。森繁久弥が主演する『社長シリーズ』では、社長が椅子坐の生



図4 『お嬢さん乾杯』（1949年）

活、部下の専務や部長、課長、秘書は床坐の生活というように、会社の役職が起居様式を象徴的に示す役割を果たしている。

図1では、椅子坐は1960～1964年、1995～1999年の作品が最も高い割合を示す。前者の時代は、高度経済成長による欧米文化を盛んに取り込んだ時期という解釈は成り立つが、後者の時代が持つ特性については解釈が難し

く、中流のインテリ層に椅子坐が関与した可能性もある。

図2では、図1と類似する要素を持つが、当然全体的に椅子坐の占める割合が減る。1965～1970年は割合としては18%と低い。しかしながら、やや裕福なインテリ層と椅子坐の起居様式を組み合わせた作品がある。1967年に製作された『炎と女』では、都会の新しい感覚の住宅に、イームズのFRPを使用した椅子を配し、生活の臭いを殆ど感じさせない室内を設定している。やや虚無的な映画全体のイメージは当時の流行でもあり、大都市でのインテリが持つ個人主義的な生き方を、デザイン面から評価の高い椅子を構成的に用いて椅子坐の生活を示している。丁度この時期は、海外のメーカーが日本に椅子の売り込みをしていた時期であり、日本の家具メーカーも海外の家具メーカーと提携を始めた時期でもあった。

1960年代後半のインテリア観は、現代も多少引きずっており、デザイナーズ物といったジャンルで高額な商品が販売されている。1995～1999年に見られる椅子坐の中には、『炎と女』の椅子坐と似たような要素も感じる。1997年に製作された『失楽園』はその代表的なものといえよう。マンションではLDKが1970年代以降主流となり、椅子座と「洋室ユカ坐」が都市部で同時に進行したと読み取れることも可能である。

3.3. 床坐と椅子坐の併用の変遷に関する概要

戦後の生活で、椅子坐が床坐の生活へ徐々に入ってくることは周知の事実であるが、その導入過程と進展は予想以上に複雑である。

図4¹²⁾は、1949年に製作された『お嬢さん乾杯』に示された起居様式である。この建物の外観はやや和風であり、玄関は完全な和風のしつらいとなっている。ところが、室内は椅子坐での生活が主で、ダイニングセットで食事をしている。裕福な家庭であることは洋風の生活スタイル全体から理解できる。少し注意しなければならないのは、高齢者のいる大家族なので、茶道をたしなむ和室も存在する点である。この建物は戦後に新築されたものではないはずである。明らかに戦前期の建物と起居様式を継承している。戦前の和洋折衷の建築には、極めて欧米に近い起居様式と日本の格式のある伝統的な起居様式が混在していたことになる。こうした混在性は特殊なものではなく、華族や教養のある富裕層にはよく見られたものと推察する。

図4の場合は椅子坐主体であるが、床坐主体の和洋折衷の建物も戦前の富裕層にはよく見られた。大正期あたりからは中流の家庭でも、応接間を建て増して椅子坐を

導入している。こうした応接間を椅子坐にした戦前の住宅は、現在も少数各地に見られる¹³⁾。

戦前からの床坐主体の和洋折衷で忘れてはならないのは、中流の家庭であっても、廊下または板の間に籐製のアームチェアを置いていたことである。このスタイルは現在も旅館やホテルで定番になっている。場合によっては和室の畳の上でも使用された。縁側でお年寄りが籐椅子で日向ぼっこをするといった生活は、都市だけでなく地方でも見られ、中流家庭におけるステータスシンボルであった。1949年に製作された『晩春』は、基本的には床坐の生活であるが、二階の部屋に籐椅子を二脚置いている。ティーテーブルとのセットで、煙草をくゆらしながらゆったりと時間を過ごすといった雰囲気画面に醸し出されている。

籐椅子に代表される椅子坐の導入とは根本的に異なるのが、学習机と椅子のセット、ダイニングテーブルと椅子という食堂セットの導入である。椅子坐の学習機の普及自体は明治期に遡る。この場合の使用者は学生ではなく、大学に勤務する学者という専門の研究者が主体であった。学校教育では椅子坐をいち早く導入した日本ではあったが、中流以下の生活層では昭和初期でも殆どが床坐で机を使用していた。

1946年に製作された『我が人生に悔い無し』は、戦前、戦中の生活場面を多数再現している。この中で見られる京大教授の机と椅子は極めて立派に示されている。一種の格式が机と椅子にはあった。こうした傾向はその後も継承され、1965年に製作された『美しさと哀しみと』にも見られる。立派な両袖机とその横に多数の専門書が置かれていることで、人物の格式を巧みに演出する。

戦後においても学習机と椅子は、専門の研究者タイプを一部踏襲し、その廉価版といったコンセプトで設計されたものが多かった。すなわち大人の持つ机と椅子の価値観を、単に学生に置き換えただけのベニヤ板を鏡板に代用した枠組みによる学習机と椅子が、1950年代前半までは主流だったということになる。

1955年に製作された『ジャンケン娘』では、パイプ製のフレームを持つ椅子と明るい色彩の机が置かれている。この学習セットは、明らかに新たな学生向けのコンセプトで設計されている。この1950年代半ば以降、全国のスチール家具業で学習セットがこぞって製作されるようになり、その後木製家具業も加わり、椅子が家庭に少しずつ浸透していく¹⁴⁾。

ダイニングセットは、これまでも各方面から指摘され

るように、1950年代より全国で展開される公団住宅が、2DKで出発したことで強い関連を示す。ステンレスのキッチンセットとダイニングセットは、1960年代に公団住宅だけでなく、広く社会に普及する。1963年に製作された『風の視線』、1970年に製作された『影の車』、1979年に製作された『ホワイト・ラブ』はその典型的な作品といえよう。

学習セット、ダイニングセットの普及は、従来の床坐到椅子が接合されるといった様式と規定できる。ところが床坐の概要でも述べたように、早ければ1970年代より『ユカ坐回帰現象』が起こる。この現象は新たな住宅で「洋室ユカ坐」が増えるというだけでなく、椅子坐の生活をしなが、一方で同じ住宅の部屋内でユカ坐も使用されるという実に奇妙な起居様式が展開する。

図5¹⁵⁾は1987年に製作された『マルサの女』に見られる場面で、ソファが後ろに置かれているのに、ファミリーコンピュータを床坐で使用している。図6¹⁶⁾は1998



図5 『マルサの女』 (1987年)



図6 『マルサの女2』 (1988年)

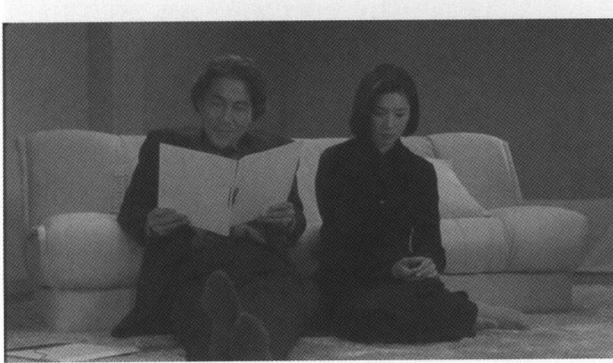


図7 『失楽園』 (1997年)

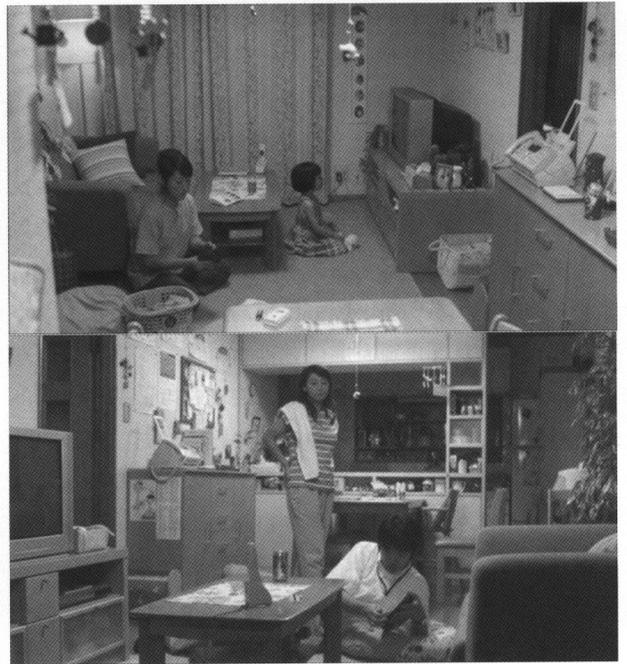


図10 『酒井家のしあわせ』 (2006年) - 2



図8 『銀のエンゼル』 (2004年)



図11 『クローズド・ノート』 (2007年)

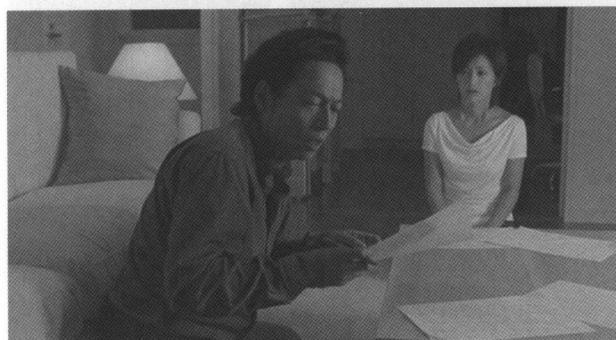


図9 『予言』 (2004年)

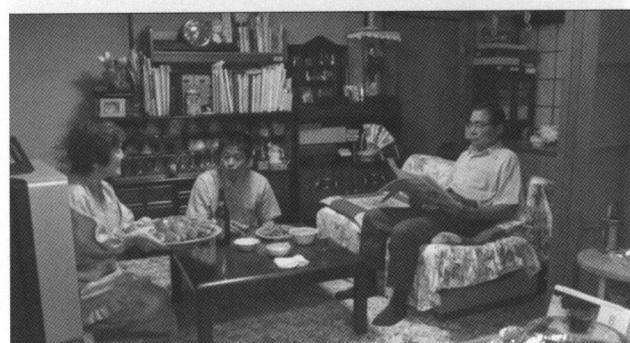


図10 『酒井家のしあわせ』 (2006年) - 1



図12 『ブタがいた教室』 (2008年)

年に製作された『マルサの女2』で、椅子坐と床坐が混在しており、フローリングの上に何かを敷いている。図6のソファはベッドのような役割を持っており、現在もこの使い方は継承されている。換言すればソファは、椅子坐でありながら床坐と似たような機能を持つ。

図7¹⁷⁾は1997年に製作された『失樂園』の一場面である。ソファがありながら、何故か床坐の姿勢をしている。おそらく、男性にとって床坐で足を投げ出す姿勢が最もゆったりとした気分になれるのであろう。ソファには床坐の際にもたれるという機能もあるようだ。

図8¹⁸⁾は2004年に製作された『銀のエンゼル』で、フローリングの上に何かを敷いて座卓を置いている。明らかに『洋室ユカ坐』の生活だが、右側にソファが置かれている。図9¹⁹⁾は2004年に製作された『予言』の場面で、生活観の差こそあれ、やはり図8と似たような床坐と椅子坐が併用されている。図10²⁰⁾は2006年に製作された『酒井家のしあわせ』に示されたもので、ソファを使用する人と床坐の人が混在する。ローテーブルはソファに近づけられている。つまり、この部屋での食事は、ソファによる椅子坐と床坐という二つの姿勢でとられる可能性がある。ソファが持つ本来の目的は、テレビを観ることであろう。図11²¹⁾は2007年に製作された『クローズド・ノート』に示されたソファの使用と床坐である。主演の沢尻エリカは、ソファの上で体を横にしてテレビを観ている。この姿勢は床坐と同じである。客が来た場合は床坐でローテーブルを使用している。ソファの使用は限りなく床坐に近いということになる。

図12²²⁾は2008年に製作された『ブタがいた教室』の一場面である。フローリングの室内に小さなローテーブルが置かれており、本を読んでいる。机と椅子は他にあって使っていないのである。こうした床坐と椅子坐の併用は、限りなく床坐に近いということになる。和室は減っても床坐そのものはそれほど極端には減らず、沢田の規定する「洋室ユカ坐」は、床坐と椅子坐の併用というスタイルで現代に定着している。

4. 各時代における起居様式の実態

1945年から5年刻みで戦後の起居様式を詳しく見ていく。すべてのシーンを紹介することは無理であるため、床坐、椅子坐、床坐と椅子坐の併用という3種類の各一場面を基本とし、時代の特徴を述べたい。

4.1. 1945～1949年

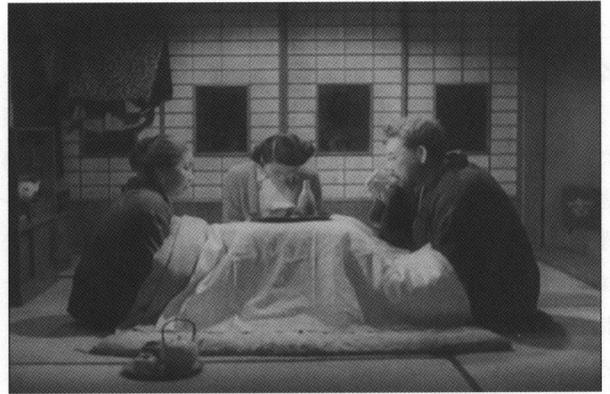


図13 床坐『酔いどれ天使』(1948年)



図14 椅子坐『湯の町悲歌』(1949年)



図15 床坐と椅子坐の併用『晩春』(1949年)

床坐が53%、椅子坐が9～13%、床坐と椅子坐の併用が34～38%である。この場合の床坐は、図13²³⁾に示した1948年に製作された『酔いどれ天使』のように、畳の敷かれた和室であって、こたつにしても現在見られるような

合成樹脂で表面に硬い皮膜を持つ天板はない。つまり、こたつの上部は、酒の肴や湯飲み茶碗を盆にて置くようなスペースしかなく、食事をするという機能は持たなかったようである。それでもこたつの機能は単に暖を取るだけでなく、家族のコミュニケーションの場であったことは言うまでもない。都市部と地方の床坐に対する差は予想以上に少なく、1949年に製作された『青い山脈』は東北の小都市を舞台にしているが、特に都会と大きく変わることはない。高校生役の杉葉子がしゃがんで使用する七輪は、大都市の下町でも広く使用されていた。都会では家庭を出れば殆どが椅子坐であるのに、社会生活と家庭生活では坐の文化が大きく異なっていた。

この時代の椅子坐は、先にも述べたように戦前の富裕層の生活を踏襲している場面が多く、高い天井の部屋で靴をそのまま室内で履くという、欧米の生活習慣を追従している点に特徴がある。図14²⁴⁾は1949年に製作された『湯の町悲歌』で、一般に歌謡映画と言われたジャンルの作品である。部屋の中にはピアノが置かれ、いずれの人物も靴を履いている。こうした椅子坐は「欧米コピー椅子坐」と規定することができる。

図15²⁵⁾は1949年に製作された『晩春』の場面で、2階の部屋での生活を示している。1階で見られる食事は完全な床坐であり、図13の床坐と何ら変わることはない。椅子は2階で使用されているが、1階の縁側でもよく使用される籐製のものである。この椅子があることで、中流以上の品格がある家庭であることが理解できる。日本の床坐と椅子坐の併用は、こうした籐製の椅子から始まったと言っても過言ではない。この起居様式も戦前から始まったものである。

1945～1949年という時代は、戦後ではあっても殆どが戦前の起居様式を継承している。

4.2. 1950～1954年

第二次大戦が終結して五年も経たないのに朝鮮戦争が勃発する。新憲法が制定され、戦争を否定する精神が強く盛り込まれたにも関わらず、多くの日本人は朝鮮戦争による経済復興に活路を見いだしていく。では映画ではそうした浮かれた成金主義が多くなるかと言えば、確かに多少は見られるが、むしろ新劇の俳優を多用したリアリズムの追求が盛んになった。

起居様式では相変わらず床坐が多く、57%と戦後で最も大きな割合を示す。図16²⁶⁾は1951年に製作された『めし』で、ちゃぶ台で食事をする典型的なサラリーマンの床坐生活である。こうした生活も戦前の生活を踏襲して



図16 床坐『めし』(1951年)



図17 椅子坐『武蔵野夫人』(1951年)

いる要素が強く、成瀬巳喜男の表現する生活観には小津安二郎と同様に、1950年代の作品には一部に戦前の生活を継承している雰囲気が漂う。戦後の文化と戦前の文化とを接合させながら、戦後の生き方を模索する。

小津の作品に限っては、特段貧しい人達の話ではない。『東京物語』の原節子が生活する安アパートを除けば、お金はなくても貧困というわけではない。ところが、三益愛子が主演する『母物シリーズ』では、常に貧困と富裕という対極的な生活場面が登場し、貧困で人生に恵まれない場面が涙を誘う。わかりきったストーリーであるのに高評で、長くシリーズ化された。この貧困を表現するには必ず床坐が登場する。床坐の表現には、1954年に製作された『山の音』のような伝統的な格式のある生活、1954年に製作された『二十四の瞳』のような普通の生活、1954年に製作された『どぶ』のような貧困な生活といういくつかのパターンが定着する時代となった。

椅子坐に関しては、図17²⁷⁾に示した『武蔵野夫人』を挙げることができる。図17の家は主役の田中絹代の家ではなく、轟夕起子が住む隣家の室内である。同じ戦後を



図18 床坐と椅子坐の併用『生きる』(1952年)

生きる中で、和風と洋風の生活が二つの家を事例として示されている。小津や成瀬と『武蔵野夫人』を監督した溝口健二の感性は少し異なるようだ。和風の家に住む生活者は地味で堅実、洋風の住宅に住む生活者は派手で奔放といった風に表現しているように見える。主役は和風の住人に決まっているのだが、それだけではドラマにならないところにスリリングな演出がある。起居様式は一見その住人の感性を象徴しているように見える。しかし、時としてそれだけでは理解できないのが映画の世界である。

床坐と椅子坐の併用は、図18²⁸⁾の『生きる』に示した場面に見られる。妻を早く亡くした主人公は、癌を患う。その癌が治癒できないことを知った時から、死後の葬儀までの出来事がこの作品のストーリーである。主人公は2階建ての家に住み、1階で床坐の生活をしている。図18上の写真は、そうした生活に小田切みきが演じる職場の若い女性が訪れた場面である。下の場面は息子夫婦が生活する2階で主人公が食事をする場面で、何故か二人だけ椅子坐になっている。この椅子坐には封建社会の名残りである男尊女卑という精神と、若い世代の生活観が

入り交じっている。床坐と椅子坐の併用における初期段階は、大正時代以降の応接間を椅子座にする、籐製の椅子を縁側に置くといった方法から、若い世代の生活を象徴する時代へと突入したといえる。『生きる』においては、息子の嫁は親と別居したがっている。その理由の一つに、椅子坐を含めた生活観の相違があったことは事実である。やがて日本の都市部では大家族制が急速に衰退する。『生きる』はその魁を示すものといえよう。

籐製の椅子はこの時代にも見られ、1951年に製作された『麦秋』にも床坐主体の家で使用されている。

4.3. 1955~1959年

時代は高度経済成長期に突入する。1950年代前半の朝鮮戦争による成金文化が進行することにより、貧富の格差が大きくなる。この時代は日本で最も映画が流行した時代であり、映画のジャンルも極めて幅広くなる。

1959年に製作された図19²⁹⁾の『朝を呼ぶ口笛』は、貧しくとも懸命に生きる若者達を表現した作品で、当然床坐の生活である。今回はDVD化されていないので取り上げなかったが、1958年に製作された『二人だけの橋』とは、床坐による生活と家族関係という点で強い共通性を持っている。病気の母親を持つ家族の生き方に誰もが共感した時代であった。当時最も貧困な家庭を取り扱った作品は、1958年に製作された『つづり方兄弟』であろう。バラックといった家屋と、その中での床坐による生活は、終戦直後の生活を再現したような雰囲気を持つ。1957年に製作された『喜びも悲しみも幾歳月』も、家族の生活は床坐である。戦後に何回か引っ越しする。そうした場面で表現される家族は、質素ではあるがまじめな生活ぶりが床坐の表現に見られる。こうした一途な生き方に多くの日本人が感銘した。

図20³⁰⁾は1955年に製作された『ジャンケン娘』の場面である。典型的な娯楽作品で、上の場面は応接間で、椅子のデザインはややクラシックなものであるが、特に目新しいというものではない。下は主演の美空ひばりの自室で、すべて椅子坐という設定になっている。富裕層の生活場面であることは間違いない。しかし青春を謳歌するということが作品のねらいとなっているため、敢えて室内を明るい色彩に演出している。椅子坐は若い女性のあこがれのインテリアであった。

1957年に製作された『くちづけ』、1959年に製作された『愛と希望の街』も椅子坐の生活を表現している。前者は増村保造の監督デビュー作で、ヌーベル・ヴァークを強く意識した作品である。内容の主たる部分が椅子坐



図19 床坐『朝を呼ぶ口笛』(1959年)



図20 椅子坐『ジャンケン娘』(1955年)



図21 床坐と椅子坐の併用『飢える魂』(1956年)

ではなく、主演の川口浩演ずる青年の母親宅だけが椅子坐であった。後者は大島渚監督デビュー作である。貧しい少年と富裕な少女という極端な対比の中で、椅子坐が富裕の象徴として表現される。この時代における椅子坐の扱いには、若い女性の憧れの生活の象徴、従来からの富裕の象徴、現代的都市生活の象徴といったように、多様なイメージが包括される。

床坐と椅子坐の併用は、図21³¹⁾に示した1956年製作の『飢える魂』に見られる。この作品はいわゆるメロドラマであり、やや富裕な生活が作品全体に見られる。図21もそうした場面の一つで、従来籐椅子を使用した場所に木製のアームチェアを置いている。主演の南田洋子が和服なので、図21は床坐を主体にした椅子坐の併用ということになる。こうした富裕層の起居様式は一部現在も継承されている。

一方籐製の椅子はこの時代も健在で、1959年に製作された『あなたと私の合言葉 さようなら、今日は Goodbye, Hello』でも2例認められる。

4.4. 1960～1964年

1950年代後半と同様に、1960年代前半も映画の全盛期であった。1950年代後半からの『社長シリーズ』『駅前シリーズ』と共に、『若大将シリーズ』『無責任シリーズ』も加わり、娯楽映画が圧倒的に多数を占める。それでも映画のジャンルとしては多様性があった。

図22³²⁾は1961年に製作された『喜劇 駅前弁当』の一場面で、床坐の生活をしている。この『駅前シリーズ』の第一作である『喜劇 駅前旅館』の原作は、井伏鱒二の『駅前旅館』であるが、後のシリーズは映画会社の企画と思われる。図22は典型的な居間を示している。ちゃぶ台、茶箆筒、4本脚でスピーカーがステレオ風に付けられたテレビ等、床坐の文化を表現する小道具も豊富に揃っている。庶民の日常生活風景を丁寧に再現しているといえよう。この家の主は画面左の柳家金語楼である。おそらく右のフランキー堺であれば、年齢が若いことから、このようなしつらいは設定されなかったであろう。

1960～1964年という時代は、少し床坐が減る傾向にある。それでも庶民の家では床坐は根強く、1963年に製作された『下町の太陽』はその代表的な作品である。少し貧困をとまなう作品は、図19の『朝を呼ぶ口笛』と同様に『キューポラのある街』が該当する。こうした映画の貧困さは記録映画ではないので、具体的なメッセージを演出で示す。床坐の貧しい生活であっても、一生懸命働けば、いつかは良い暮らしができるという希望を、多く



図22 床坐『喜劇 駅前弁当』(1961年)

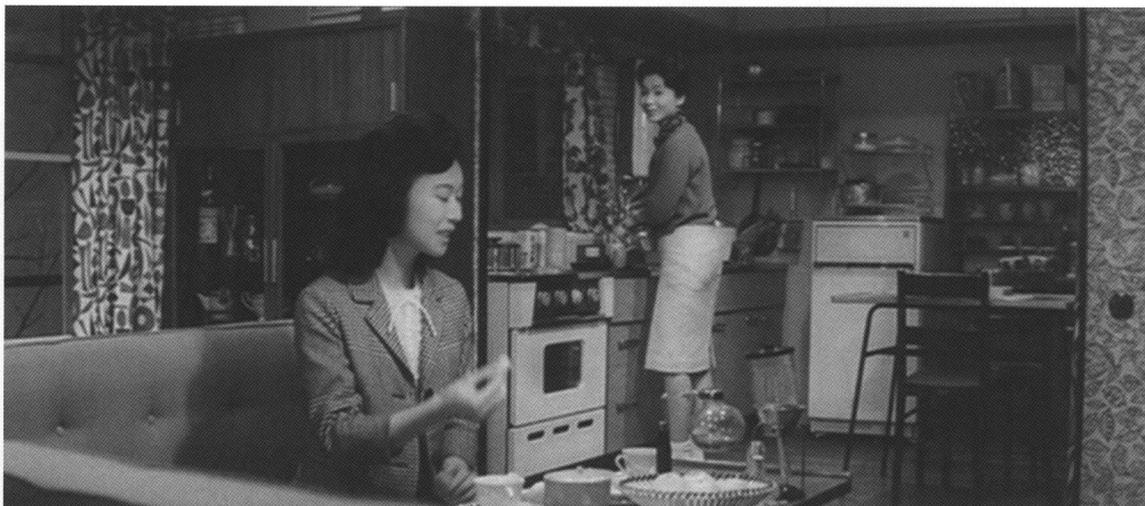


図23 椅子坐『風の視線』(1963年)



図24 床坐と椅子坐の併用『波の塔』(1960年)

の若者が吉永小百合という若い女優の演技を通して受け取ったのである。

椅子坐に関しては1963年に製作された図23³³⁾の『風の視線』を通して考えてみたい。原作は松本清張の同名の

小説であることから、サスペンスを秘めた表現が演出されたことは間違いない。新珠三千代演じる主人公の自宅は豪邸であり、茶室もあるような床坐と椅子坐の折衷である。ところが図23は、愛人のカメラマンとその妻が住む室内で、LDKに近い間取りは椅子坐になっている。おそらくマンションの室内という設定だと思われる。ということは、和室があるという可能性も否定できない。それでも襖のような間仕切りはあるにせよ、LDKに近い空間が登場したことは、中流社会に椅子坐が浸透したことになり、LDKは椅子坐の普及に大きな役割を果たした。

椅子坐は、1964年に製作された『赤いハンカチ』にも認められる。この場合は極めて大富豪の屋敷内として表現されており、過去の椅子坐と大きな違いはない。

床坐と椅子坐の併用に関しては、1960年に製作された『波の塔』を事例として図24³⁴⁾に示した。この作品も松本清張の小説を脚色したもので、二間続きの部屋をそれ

ぞれ床坐と椅子坐で使用している。やや富裕な家庭で、和服を着た音羽信子がいる部屋は、食事をする部屋なのだろうか。ダイニングセットの有無を確認することはできない。奥の椅子坐の部屋は居間のように、区切りはあるにせよ、二つの部屋をワンルーム的な要素で使用している。他に椅子坐の応接室もあり、全体としては椅子坐の要素がやや強い。

床坐と椅子坐の併用は、1963年に製作された『ハワイの若大将』『江分利満氏の優雅な生活』にも見られ、1階は床坐、2階が椅子坐というスタイルになっている。つまり1952年に製作された『生きる』の起居様式は、その後も多少モダンな雰囲気加えながら継承されていることになる。二世帯住宅の場合、1階は高齢者が生活することが多く、床坐になりやすい。

4.5. 1965～1969年

この時代の後半は映画産業が衰退し始める時期である。



図25 床坐『白昼堂々』（1968年）



図26 椅子坐『哀愁の夜』（1966年）



図27 床坐と椅子坐の併用『美しさと哀しみと』（1965年）

日活では看板スターであった石原裕次郎や小林旭が、かつてのようなスターとしての勢いがなくなり、世代交代が順調に進まなかった。また、テレビドラマの水準が高くなり、映画スターのテレビ進出が目立つようになる。映画の魅力そのものが低下する傾向にあった。

床坐の事例として1968年に製作された『白昼堂々』を図25³⁵⁾に示した。場面全体が庶民の生活をよく表現している。この作品の内容は、九州の炭坑が閉山することになり、従業員だった元スリの男が仲間を誘って集団万引きを繰り返すというもので、危なくなると九州の炭坑住宅に帰る。図25は、渥美清演じる主人公が恩のある警察官の家庭を訪れている場面で、後年シリーズ化される『男はつらいよ』の生活シーンと多少共通した雰囲気を感じさせる。監督は野村芳太郎であるが、松竹の製作した作品には、よく似た生活シーンがある。

他にも1966年に製作された『愛と死の記録』『哀愁の夜』を挙げることができる。前者は渡哲也と吉永小百合が主演する純愛ドラマで、原爆の被爆者である渡哲也が死ぬということから、『愛と死を見つめて』と逆のストーリーになっている。庶民が一生懸命暮らしていることを床坐を通して表現している。後者は地方の富裕な農家が舞台になっており、祝いの席に膳が使用されている。つまり、この床坐は古い伝統的で格式のある旧家を象徴的に示しているといえよう。こうした床坐のあり方は封建的な地方文化の遺産として、青春歌謡路線の映画にしばしば登場する。

椅子坐は図26³⁶⁾に示した1966年製作の『哀愁の夜』を挙げることができる。確かに富裕な家で、椅子坐の生活だけが表現されている。但し、ソファに座っている人

物は和服を着ているので、第2の規定では和室があると推定し、床坐と椅子坐の併用とした。たとえ富裕層であっても、1966年という時代では、完全な椅子坐は少ないのではなかろうか。

1966年に製作された『白昼の通り魔』では、洋室に大きなダイニングテーブルと椅子が置かれており、椅子坐の可能性は高い。この作品も住宅の一部しか示されていない。富裕層の生活を表現する場合、どうしても応接室、居間、ダイニングルームを椅子坐で示すことが多い。洋風の椅子坐を示すことは、その家の経済力と近代的な精神を象徴的に見せることに繋がる。

図27³⁷⁾は、床坐と椅子坐の併用に関する概要でも触れた作品である。主人公を演じる八千草薫は和服を身につけている。名の知れた画家という設定であり、床坐と椅子坐の単なる併用というより、それぞれの良さを引き出したインテリアを強調している。つまり生活観というより、共演の加賀まりこも含め、趣味の良い日本文化を示すことが作品に必要なのであろう。

庶民的な床坐と椅子坐の併用は、1969年に製作された『でっかいでっかい野郎』『男はつらいよ』に見られる。前者は、四つの家庭の中で三つの家庭が床坐を中心としている。後者はシリーズとして1990年代まで続くが、最初からダイニングセットがある。通常は居間のちゃぶ台で食事をしているので目立たないが、床坐を主体とした椅子坐との併用である。この様式が多いというのが1965～1969年という時代であった。こうした床坐主体の様式が、中流の生活で椅子坐主体に逆転するのは先の話である。子供の学習机、ダイニングセットの普及は進む。それでも簡単には椅子坐主体の生活には転換しない。

4.6. 1970～1974年

1970年代になると全国的に映画館の倒産が相次ぐ¹³⁾。庶民の娯楽が増えるなど、多様な要因が考えられるが、テレビが普及し、放映するドラマの内容が益々充実したため、人気のある映画俳優が盛んにテレビドラマに出演するようになったことも、映画産業の不振に繋がった。この時代の映画は、若者の新しい生き方をテーマとしたものが多くなる。長髪の若い男性、同棲、安アパート等がセットで登場する。またコミックを原作とする作品が増えるのもこの時代である。

図28³⁹⁾は1974年に製作された『神田川』の場面で、当時の貧乏暮らしをする若者の風俗をよく伝えている。ワンルームの和室床坐を代表する映画である。関根恵子演じる女性は、畳の上に座布団を敷いて座している。何から何まで床坐の道具を使用して生活している。1974年に製作された『赤ちょうちん』『バージンブルース』『あばよダチ公』でも類似した床坐の場面が見られる。

1974年に製作された『わが道』にも床坐の場面がある。音羽信子演じる主人公が古いちゃぶ台の前に事件の支援者と座っており、1950年代の生活描写と似たように示されている。庶民の生活には伝統的な床坐が未だ定着しているということなのだろう。また1972年に製作された『忍ぶ川』では東北地方の旧家の床坐が示されている。映画の内容が撮影された時代より少し古く設定されているかもしれないが、地方の旧家では格式のある床坐の生活が一部継承されていたことは間違いない。

映画を通して見る限り、1970～1974は床坐の場面が1960年代後半に比較して少し増加している。この要因として、若い世代の安アパートでの床坐を取り上げた作品がこの時代に多かったことが挙げられる。こうした作品は若い世代に受け入れられたが、逆に40代以上の年齢層の映画離れが進行していく。

椅子坐に関しては、1970年に製作された『影の車』の場面を図29⁴⁰⁾に示した。松本清張原作の映画化には、椅子坐の生活が比較的多く登場する。図29の住居は集合住宅で、中流のサラリーマンの家庭である。子供がいなく、主人公の妻も自宅で趣味の教室を開いていることから、少し華やかだ感じがインテリアにある。室内はいずれも椅子坐であるため、第1の規定では椅子坐とした。しかしながら、主人公の加藤剛は図29の食事場面では和服を着ている。このため第2の規定では、床坐と椅子坐の併用として捉えた。それでもマンション等の集合住宅では、椅子坐が増加する傾向にあるのは事実である。

床坐と椅子坐の併用は、1973年に製作された『同棲時代』に見られる。図30⁴¹⁾では、床坐でビールを飲んでいる。しかし、同じ室内には机と椅子があり、机の上は物置になっている。他の場面も含め、床坐と椅子坐が混在する。この混在とは、伝統的な二つの起居様式が点在するといったものではなく、新しい融合性を示したものと解釈する。1974年に製作された『赤ちょうちん』では、ソファと床坐のこたつが同じ部屋に置かれている。決



図28 床坐『神田川』(1974年)



図29 椅子坐『影の車』(1970年)



図30 床坐と椅子坐の併用『同棲時代』(1973年)

して豊かな生活ではない場面に、新しい起居様式が展開する。こうした生活のあり方は、現代における起居様式形成に大きな役割を果たすことになる。

4.7. 1975~1979年

この時代はDVD化された作品が少ない。山口百恵が主演した映画のDVDが多いなど、作品内容に偏りが生じる。言い換えれば、1950年代、1960年代のような、映画を代表するような名作が見当たらないことが、時代の特徴と読み取れる。『男はつらいよ』がシリーズ化し、その後も広く親しまれるようになることは、映画における一つの功罪という指摘もできる。

1970~1974年に引き続き、床坐が少し盛り返す傾向が認められる。図31⁴²⁾は1975年に製作された『同胞』の一場で、映画の舞台は岩手県の小さな村である。岩手県でロケをしたかどうかは確認していないが、戦前に建てられた農家を使用して撮影されたことは間違いない。図31の下に見られるストーブは、以前使用されていた囲炉裏の中に置かれているようだ。囲炉裏の縁に食器を置き、卓子や膳は使用していない。実に古い生活文化を踏襲している。この場面を見る限り、監督の山田洋次は、地方の農村の起居様式に関する造詣が深い。

1975年に製作された『祭りの準備』にも、床坐の場面が数多く見られる。但し、時代背景が昭和30年代の高知県中村市ということから、映画製作時よりも15年程度前の地方における起居様式を再現したことになる。学習机も床坐であり、再現という意味では評価できる。

1977年に製作された『幸福の黄色いハンカチ』も床坐の場面がある。高倉健演じる主人公が、炭坑住宅で座卓をひっくり返すシーンを記憶している人も多い。この映画も山田洋次が監督をしている。

椅子坐を表現した映画は意外に少ない。1976年に製作された『不毛地帯』の一場面を図32⁴³⁾に示した。確かに応接セットを使用している。ところが、仲代達也演じるこの家の主は着物を着ており、和室があると想定されることから、第2の規定では床坐と椅子坐の併用と解釈した。1970年代後半になると、海外に長期滞在した経験を持つサラリーマンも増えているはずである。そうした人達が日本で椅子坐で生活することはごく自然である。ところが、該当する内容の映画は管見の限り見当たらない。

床坐と椅子坐の併用は、1979年に製作された『ホワイト・ラブ』に代表的な事例が見られる。図33⁴⁴⁾はLDKの間取りにおける起居様式を示したもので、山口百恵演じる主人公はリビングルームでは床坐である。奥にはダイ

ニングセットがあり、典型的な床坐と椅子坐の併用ということになる。図23に示した1963年製作の『風の視



図31 床坐『同胞』(1975年)



図32 椅子坐『不毛地帯』(1976年)



図33 床坐と椅子坐の併用『ホワイト・ラブ』(1979年)

線』がLDKのリビングルームを椅子坐とした典型的な例であるとするれば、遅れて登場した図33に見られるLDKのリビングルームは、床坐を採用した典型的な例と規定することができる。この二つの事例は現在もLDKにおける起居様式の定番となっている。

富裕層の椅子坐を主体にした床坐との併用は、1979年に製作された『配達されない三通の手紙』に見られる。また床坐を主体とした椅子坐との併用は1979年に製作された『天使を誘惑』に見られ、従来型の併用も存在する。

4.8. 1980~1984年

この時代は、現代の起居様式にかなり近づいた印象を受ける。床坐はまた減少する傾向を示し、逆に椅子坐は増加する傾向を示す。若い世代の映画が多いことは1970年代前半と同様であるが、映画の内容は薬師丸ひろ子の主演映画に代表されるように、経済的に豊かな時代における品の良い娯楽といった作品が多い。貧乏しても社会の既成概念にとらわれず、若者が自立を目指すといった深刻なものではない。

床坐の場面は、1982年に製作された『蒲田行進曲』を図34⁴⁵⁾に示した。室内にベッドが置かれていても、床坐の生活をしている。ベッドは椅子坐とセットにする必然性もない。ワンルームの室内にベッドを置くと、とにかく空間が狭くなり、椅子坐の生活は難しい。床坐は、ワンルームでは最も空間を有効に活かした生活なのである。

床坐の伝統的な生活には、正座に代表されるような儀礼的な姿勢要素が江戸期から形成された⁴⁶⁾。図34には家族を通した姿勢に関する秩序があるわけではない。つまり、この床坐は、社会秩序、家族間の秩序が問題ではなく、個人の生活しやすい坐ということになる。

椅子坐は1983年に製作された『探偵物語』の一場面を図35⁴⁷⁾に示した。裕福な家庭のお嬢様が主役であり、そうした家庭を演出したのであろう。生活観というものがないインテリアからは滲み出てこない。それが演出効果と言われれば致し方ないが、椅子坐にもそれなりにコミュニケーションが存在したはずである。

1983年に製作された『家族ゲーム』も、集合住宅の椅子坐を表現している。平和な時代の受験生とその家庭教師を取り巻く人間模様を、椅子坐を通した行為を皮肉も交えてゲームという意味づけで集約させている。この椅子坐は原作にあったのだろうか。最後の横一列になってテーブルで食事をするシーンは、非現実的なものであり、森田芳光監督の意図的な演出であることは間違いない。おそらく、床坐の生活ではこの映画の意味は伝えられな

かったであろう。

床坐と椅子坐の併用は、1981年に製作された『男はつらいよ 浪花の恋の寅次郎』の場面を図36⁴⁸⁾に示した。先にも述べたように、『男はつらいよ』のシリーズは、当初よりダイニングセットがあり、ここで食事をする場面もシリーズの中で数回見られる。寅さんの妹宅も床坐と椅子坐の併用で、他の家庭もおおむね同じ起居様式である。テレビ等の家庭電化製品は時代と共に変わっても、日本人の起居様式は極端には変わらないというのが山田洋次監督の主張なのであろう。

4.9. 1985~1989年

この時代の作品には床坐が極端に減っていく。社会的にはバブル期に突入し、地価が極端に高騰した。では何故床坐の場面が極端に映画から姿を消したのかというこ

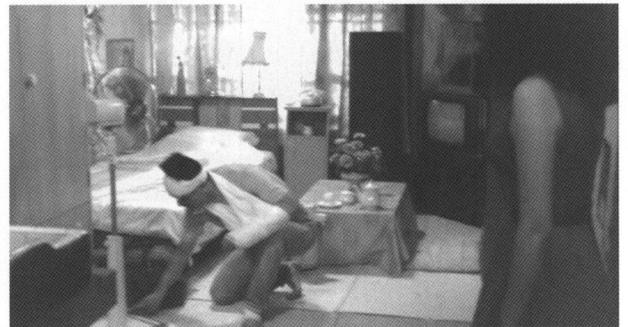


図34 床坐『蒲田行進曲』(1982年)

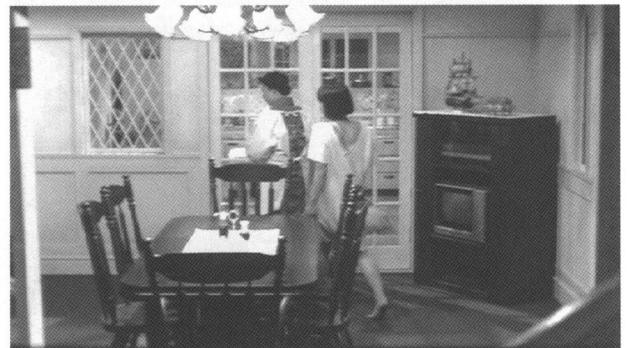


図35 椅子坐『探偵物語』(1983年)



図36 床坐と椅子坐の併用

『男はつらいよ 浪花の恋の寅次郎』(1981年)

となるが、社会全体としてはそれほど大きな減少があったと考えられないことから、映画の内容が深く関わっていると考えられる。1987年に製作された『私をスキーに連れてって』、1989年に製作された『彼女が水着にきがえたら』といった若者向けの映画は、娯乐的であり、また消費社会の精神を高揚させることを意図した内容になっている。つまりバブル期の映画には、トレンドィーで少し品の良い娯楽を目的に製作された作品が多いということになる。これらの作品には、貧困さとか、社会への抵抗といった内容は殆ど含まれていない。興行としての成功がまず先にありきという製作観が強い。

床坐は、1986年に製作された『彼のオートバイ 彼女の島』の中に、図37⁴⁹⁾に示した場面がある。地方の場面で古い座卓が使用されている。この場合の床坐は、地方の家庭生活の象徴とは性格がやや異なり、昔ながらの変わらぬ生活というノスタルジックな象徴と読み取れる。1985年に製作された『男はつらいよ 柴又より愛をこめて』は、伊豆下田の場面で和室による生活が少し見られるという程度で、床坐の生活を十分示しているとはいえない。こうしてみると、1980年代後半の映画には床坐が殆ど紹介されていないことになる。

椅子坐は、1987年に製作された『恋人たちの時刻』に見られる場面を、図38⁵⁰⁾として示した。この家庭のインテリアには、ややアンティークなイメージがあり、一つの統一感がある。ダイニングチェアにしても、1949年に製作された『破れ太鼓』で使用されたシェーカータイプに類似性を感じる。ところが、椅子坐ではあっても単に洋風を指しているわけでもなく、ダイニングテーブルの上での食事は和食である。何か少し不自然なようにも感じるが、これも一つの生活スタイルなのであろう。

1985年に製作された『友よ、静かに眠れ』は、小規模でレトロなホテル内の場面が多い。確かに椅子坐ではあっても、生活との密着度はやや低い。

この時代は床坐と椅子坐の併用が多い。戦後で最も多い割合を示している。図39⁵¹⁾は1989年に製作された『君は僕をスキになる』の場面である。この家は全体的に洋風に見える。ところが電気こたつの使用もあり、和風のたたずまいも一部見られる。

1985年に製作された『早春物語』の1階は、和風で座卓を使用している。また同じ1985年に製作された『さびしんぼう』では、この時代では珍しくなった床坐の学習机があり、『君は僕を好きになる』とは対照的なインテリアを展開している。先に概要で述べた1987年に製作さ

れた『マルサの女』に示される「洋室ユカ坐」とは些か趣きが異なる。こうした併用の多様性は、1960年代から続いてきたが、映画を通して見る限り、単一の様式に進む傾向は見られない。それでも、「洋室ユカ坐」が少しずつ増加していると捉えるべきであろう。



図37 床坐『彼のオートバイ 彼女の島』(1986年)



図38 椅子坐『恋人たちの時刻』(1987年)



図39 床坐と椅子坐の併用『君は僕をスキになる』(1989年)

4.10. 1990～1994年

この時代の映画は一部VHSにされている。しかし当時のVHSは品切れで購入が困難である。当然DVDにされた作品が少ないことから、17作品しか収集することができなかった。この点は1970～1999までの作品全体にも指摘することができ、統計的な精度に影響することは否めない。

床坐は、1990年に製作された『病院へ行こう』の場面を図40⁵²⁾に示した。真田広之演じる主人公の奥さんの実家で、地方の家庭を示したかったのであろう。扇風機、床坐用の学習机、唐木風の座卓が置かれ、床坐の姿勢で電話を使用している。この場面自体は1950年代後半の生活と殆ど変わらない。

1991年に製作された『男はつらいよ 寅次郎の告白』では、鳥取県の住宅の場面に床坐が見られる。都市の文化に対して、床坐は地方の生活文化という一種の起居様式の対比として用いられているようだ。

少し変わった床坐の使用方法では、1992年に製作された『シコ ふんじゃった』を挙げることができる。貧乏な留学生のアパートは畳の部屋で、日本趣味も含めて敢えて床坐の生活をしているように感じる。留学生の表現を、一昔前に見られた一般的な大学生の生活を再現することで示したかったのだろう。

床坐は1985～1989年に比較して少し増えている。これは沢田のいう「ユカ坐回帰現象」が作品に関わっているというより、地方を中心とする伝統的な生活を何らかの意図で示していると捉えるべきであろう。

椅子坐については、1992年に製作された『私を抱いてそしてキスして』の場面を図41⁵³⁾に示した。いかにも都市の新しい集合住宅といった雰囲気、パイプフレームの椅子が軽やかさを演出している。1991年に製作された『男はつらいよ 寅次郎の告白』では後藤久美子演じる少女の住宅が椅子坐になっている。この場合も集合住宅で、特別な富裕層の生活を椅子坐を通して示しているわけではない。

床坐と椅子坐の併用は、1994年に製作された『釣りバカ日誌 7』の一場面を図42⁵⁴⁾に示した。居間はフローリングの上にカーペットの類を敷き、座卓を置いている。但し後ろにはソファがあり「洋室ユカ坐」という一面を持っている。この部屋の端には引き戸が見えることから、隣室は和室である可能性が高い。つまり、住宅の主要部分は床坐ということになり、「和室ユカ坐」と「洋室ユカ坐」が混在した住宅と規定することができる。

1991年に製作された『あいつ』は「洋室ユカ坐」であ

る。この「洋室ユカ坐」は、椅子坐との併用であり、椅子を使用していないという具体的な根拠はない。

1992年に製作された『シコ ふんじゃった』に登場する床坐と椅子坐の併用は、地方のやや古い家屋で、籐製の椅子が縁側に置かれている。この様式は先にも述べたように戦前から踏襲されているものであり、おそらく戦前のインテリアと基本部分は同じと推察される。

4.11. 1995～1999年

現代に近づくこの時代は、起居様式も当然現代に近づいているはずである。ところが、床坐の場面もあり、新しい生活文化と伝統的な生活文化が二極化する傾向にある。そして青春時代を振り返るといったノスタルジックな内容も散見される。1998年に製作された『がんばっていきまっしょい』も、1976年という時代を再現したものである。



図40 床坐『病院へ行こう』（1990年）



図41 椅子坐『私を抱いてそしてキスして』（1992年）



図42 床坐と椅子坐の併用『釣りバカ日誌 7』（1994年）

床坐は図43⁵⁵⁾に示したように、1998年に製作された『のど自慢』に見られる。和室に電気こたつを置き、こたつ板の上には籠にミカンがいてあるといった生活観は、やはり一種のノスタルジーを感じさせる。

1995年に製作された『渚のシンドバッド』にはダイニングがなく、畳の部屋に置かれたこたつで夏に食事をしている。1999年に製作された『どんてん生活』はコミックを映画化したもので、具体的な人生の目標を見いだせない若者の生活を表現している。ごちゃごちゃモノが乱雑に置かれている部屋にこたつがある。こうした若者の生活場面は、1970年代前半に見られた若者の場面と多少共通する部分はあるものの、バブル崩壊という見通しのきかない社会が背景にあることも見逃せない。作品を見る限り、最も気楽な暮らし方が床坐なのであろう。

椅子坐の事例は、1997年に製作された『鉄塔 武蔵野線』を図44⁵⁶⁾として示した。東京の郊外にある中流家庭の子供が主役で、特に日常生活で困ったことがあるわけではない。ふとした動機から高压線の鉄塔下に瓶の王冠を加工したメダルを埋めていくストーリーは、誰もが一度は体験したような小さな冒険である。こうしたストーリーの背景にあるのは、図44に示された適度に配慮された生活空間であり、特に不満はないが、何となく退屈な毎日である。新しく造成した新興住宅地の中流家庭が持つ雰囲気、椅子坐が象徴しているのかもしれない。

1997年に製作された『失樂園』に椅子坐の場面が出てくる。都会の中に潜む日常生活の物足りなさ、また孤独感には生活の臭いを感じさせない椅子坐がよく似合うのかもしれない。こうしたインテリアの先行例は、1960年代に製作された松本清張原作の映画に見られ、現代でも都会に生活するインテリ層の冷えた夫婦関係を表現する際にはよく用いられる。

床坐と椅子坐の併用は、図45⁵⁷⁾に1995年に製作された『男はつらいよ 寅次郎紅の花』の場面を示した。この場面は寅次郎の妹であるさくらの家で、ダイニングセットのある部屋と和室は、それぞれ椅子坐と床坐が併用されている。妹のさくらが育った家と図45の家は、同じ床坐と椅子坐の併用でも内容がかなり違う。日本の平均的な起居様式が、1960年代から1990年代で変化したように、上手な演出でゆったりとした生活の変化を示している。

1997年に製作された『東京日和』は、LDKの住宅に和室がある。回想シーンであるため扇風機、テレビ、炊飯器、ミシンが30年程度古いように感じる。1999年に製作された『あの、夏の日 とんでろ じいちゃん』では、田

舎の家の縁側に籐製の椅子が登場する。こうした椅子は一世代前の代物である。監督の大林宣彦は、時代背景と室内のしつらいの関連性についてはよく心得ている。

4.12. 2000～2004年

この時代からコンピュータが家庭の中で普通に使用されるようになり、コンピュータを通して若い世代の不安な精神を投影するといった作品が登場する。その代表が2004年に製作された『インストール』である。具体的な内容と坐の関係は後で述べるが、コンピュータがすべて椅子坐で示されているとは限らない。こうした新しい製品と生活様式の関係は一律的に考えるべきではない。家庭とオフィスの空間は本質的に異なるものであり、家庭生活の効率論から見るのは甚だ危険である。



図43 床坐『のど自慢』(1998年)



図44 椅子坐『鉄塔 武蔵野線』(1997年)



図45 床坐と椅子坐の併用
『男はつらいよ 寅次郎紅の花』(1995年)

床坐は、2001年に製作された『みんなのいえ』の場面を図46⁵⁸⁾に示した。少し古い家で田中邦衛演じる大工の夫婦が生活している。娘夫婦は集合住宅で生活しており、年齢による起居様式の相違を示している。但し、新しく建てる家は和洋折衷の住宅である。三谷幸喜が脚本と監督をしているが、建築様式や家具に強いこだわりを持っていることが場面の端々から伝わってくる。三谷の実体験をモデルにしており、日本人の起居様式に関するこだわりをコメディ風に表現している。

2001年に製作された『歩く、人』では、初老の男が暮らす畳のワンルームが登場する。2003年に製作された『ミラーを拭く男』では、大滝秀治演じる老人が床座の生活をしている。この部屋は住宅内一室であり、おそらく椅子坐の生活も存在する。一部椅子坐が含まれているが、2000年に製作された『秘密』も、地方にある親の家は床坐を基本としている。こうしてみると、床坐、畳の文化は老人の生活、または過去の生活という意味合いが強く感じられる。それでも若い世代は、床坐を否定するわけではなく、親の家ではすぐに順応している。

椅子坐の代表的な場面は、2004年に製作された『インストール』を図47⁵⁹⁾に示した。母と娘がマンションで生活している。母親は教員をしており、娘は高校生で人生の目標が持てない。これまでの例のように、空虚でコミュニケーションのないという演出には、室内に飾り気のない椅子坐が用いられる。こうしたマンションの椅子坐は、一種のパターンになっている。主演の上戸彩が演じる女子高校生は、小学生の男子とコンピュータによるチャットに夢中になる。この小学生の部屋は畳敷きでありながら、椅子が置かれており、押し入れの中で二人はコンピュータを操作している。フローリングの椅子坐に対し、畳の和室での椅子坐が、いかにもコミュニケーションがとりやすいといったイメージを与えている。

2002年に製作された『仄暗い水の底から』は、マンションの生活場面で普通のダイニングセットを使用している。同年製作された『うつつ』も、中流のサラリーマンが住むLDKのマンションは椅子坐である。この時代に示される椅子坐は、かつての豪邸におけるものとは異なり、都市に生活する中流層のマンションを舞台としている。

床坐と椅子坐の併用は、図48⁶⁰⁾に2003年に製作された『ミラーを拭く男』の一場面を示した。手前の部屋は椅子坐、奥の部屋は和室になっている。どこにでも見られる和洋折衷の間取りである。

2002年に製作された『折り梅』では、若い世代と同居

する初老の婦人が和室にベッド、座卓という組み合わせで生活している。

2003年に製作された『バーバー吉野』は、地方を舞台にした内容である。姉と弟はごく普通の学習机を子供部屋で使用している。取り立てて洋風化が進んでいない生活は意図的な演出なのであろうか。

「洋室ユカ坐」に関しては、概要の部分で2004年に製作された『銀のエンゼル』『予言』を図8、9に示した。確かにこうした新たな坐の様式は若い世代を中心に増加していることは間違いない。2004年に製作された『花とアリス』では、蒼井優演じる女子高校生が椅子の上で床坐のような姿勢をしている。総じて新しい坐の文化と規定することができる。フローリングの床=椅子坐、椅子

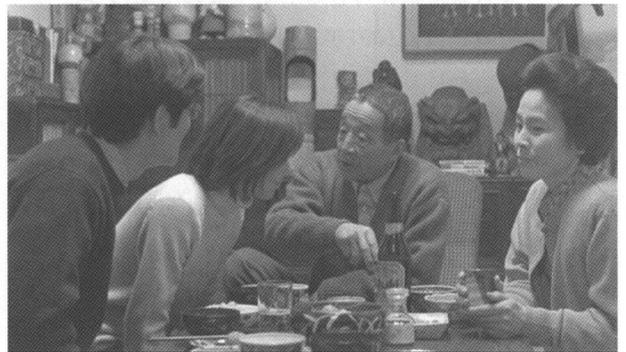


図46 床坐『みんなのいえ』（2001年）



図47 椅子坐『インストール』（2004年）



図48 床坐と椅子坐の併用『ミラーを拭く男』（2003年）

＝椅子坐の姿勢という行儀作法が一部崩壊しているのかもしれない。

4. 13. 2005～2008年

2005年以降は現代の起居様式として捉える。

床坐を示す場面は、2007年に製作された『赤い文化住宅の初子』を図49⁶¹⁾に示した。父親が蒸発し、母親が病死した家庭で、頼りにならない兄と一緒に妹が頑張っているという内容である。二人で食事をする場面は、まるで1950年代の生活と同じだ。2006年に製作された『手紙』の中にも床坐の場面がある。ワンルームの和室で、こたつを中心に生活している。これらの作品に見られる床坐は、いずれも貧しい生活の象徴として示されている。

2006年に製作された『酒井家のしあわせ』では、地方にある父親の実家で床坐が見られる。こうした田舎の古い生活というイメージと、都会の貧しさだけが床坐の示すシーンの特徴になった。映画においても一般的な家庭は、殆どが椅子坐との併用になっている。「洋室ユカ坐」は床坐と椅子坐の併用が原則であり、床坐到規定できる事例は見当たらない。

椅子坐の事例は、2005年に製作された『電車男』の場面を図50⁶²⁾として示した。憧れの女性の家は、とにかく立派な邸宅であり、椅子坐で統一されている。このような豪邸は、1950年代に三益愛子が主演した『母物シリーズ』に類似した要素があり、富裕層と貧乏人の極めて単純な対比に用いている。その椅子坐に生活観があるわけではない。一つの身分を示す象徴である。

椅子坐を示す他の場面は、2006年に製作された『かぞくのひけつ』ではダイニングセットだけ、2007年に製作された『奈緒子』も同じダイニングセットの場面しか示されていない。2007年に製作された『バッテリー』は、子供部屋の場面だけで椅子坐としただけである。つまり中流家庭の部分的な生活場面だけでは、完全な椅子坐と判断することは難しい。映画の場面を社会全体の動向と比較した場合、図2の27%より椅子坐は少ない可能性が高い。ダイニングでの食事場면을作品に取り込むことは、中流の日常の生活を象徴しているというだけで、それ以上の意味づけはなされていないように感じる。

床坐と椅子坐の併用は、2007年に製作された『そのときは彼によろしく』の場面を図51⁶³⁾に示した。「洋室ユカ坐」の代表的な事例といえよう。但し、この場面は10年程度前の回想シーンであるため、1990年代に位置づける必要がある。2007年に製作された『クローズド・ノー

ト』も含め、ソファーと床坐の併用は、既に定着した起居様式となっている。つまり「洋室ユカ坐」はかなり長い年月を経て増加したことになる。

2007年に製作された『天然コケッコー』は、コミックを映画化したものである。田舎の素朴な生活を表現した内容であるが、家族はダイニングセットでも食事をするし、居間の座卓でも食事をしている。さらに、縁側で昔から夏の定番となっているスイカを食べている。ダイニングセットに象徴されるように、生活の一部は椅子坐になったが、50年以上前とまったく変化しない生活様式も存在する。この統一性のない生活も、戦後日本における起居様式の変遷を考える上では重要な意味を持つ。



図49 床坐『赤い文化住宅の初子』（2007年）



図50 椅子坐『電車男』（2005年）



図51 床坐と椅子坐の併用
『そのときは彼によろしく』（2007年）

5. 考察及びまとめ

5.1. 映画における起居様式の場面に関する信憑性

303本の映画を通して、戦後日本の起居様式に関する各時代の特徴を概観した。戦後上映された映画の中には、時代劇も含め、日常の生活場面が示されていない作品も多い。今回購入したDVDの中にも、30以上の作品に起居様式が示されていないものがあった。また、過去の回想シーンが大半を占めるものは、調査の都合上割愛した。5年間を一つの時代区分として資料を集約したが、作品数や内容に偏りが生じたことは否めない。

映画が一次資料ではない点や上記の偏りがあったとしても、戦後における床坐、椅子坐の変遷を知る手がかりは図1、2の中に多少ある。床坐、椅子坐の実態は図1、2の割合より少なく、特に椅子坐に関しては、図2の1960年以降の割合よりかなり低い数値を示すと考えられる。マンションのような集合住宅では、2LDK、3LDKといった間取りの場合、1990年代までは和室が一つ含まれていることが多いのに、映画では殆どがLDKの場面しか示されていないことを論拠に挙げることができる。つまり、図1、2という資料は、数値を補正することで、社会の実態を把握する可能性があると考えられる。その意味では、起居様式の実態を定量化することに繋がる。

持ち家の戸建て住宅に関する現状は、プレハブ住宅会社の2006年調査⁶⁾で、和室の設置は、なし(22.6%)、1室(60%)、2室(14.7%)、3室以上(2.8%)となっている。さらにLDKの一部を畳敷きにした空間(12.0%)を加えれば、椅子坐だけの住宅は極めて少ないということになる。つまり近年新築された住宅内でも、圧倒的に床坐と椅子坐の併用が多く、過去の住宅との関係を考慮すれば、図2の2005~2008年の椅子坐27%は明らかに多すぎる。

5.2. 「洋室ユカ坐」の出現と展開

日本人の中流家庭で、椅子を生活に取り込む時期は戦前に遡るが、ソファを取り込む時期は遅い。沢田の規定する「洋室ユカ坐」とは、このソファを取り込んだ時期より、さらに後になることは間違いない。「洋室ユカ坐」とは、ソファを使用しないというものではなく、一種の使い分けをしているのである。

では何故日本人はフローリングの部屋で床坐を復活させたのかということになるが、単身の生活者と子供のいる家族とでは価値観が異なる。

単身の生活者の場合、若い世代では圧倒的にフローリングのワンルームに人気が集まる。一般的な部屋の広

さは3坪+キッチンである。この空間にベッドを置けば、家具等を置く場所はかなり限定される。仮に大学生が学習机と椅子を置いた場合、食事の方法が問題となる。すなわち、食事用の小さなテーブルと椅子を置けば部屋の空間が著しく圧迫される。このことから、近年は学習机と椅子を置かない大学生も多い。そしてベッド以外は小さな座卓を置いて床坐の生活している。しかしながら、フローリングの部屋が畳の部屋に変更されることは一切ない。

結婚してマンションを購入した際、多くの人がダイニングセットも購入する。子供が生まれてもそうした椅子坐を貫く家庭も多い。ところが、LDKの場合、ソファがあっても床坐で生活するという「ユカ坐回帰現象」が起こるケースも少なくない。沢田はこの「ユカ坐回帰現象」と「洋室ユカ坐」を連動すると捉えている。映画の場面では、こうした実態を時系列に検証することは出来ないが、沢田の主張する1980年代半ばより始まった訳ではなく、1970年代から始まっている。そして1980年代後半から多くなる。

映画を通して見る限り、沢田が主張する基本的な部分は間違っていない。しかし、戦後における起居様式の多様性は1960年代から顕著になり、床坐、椅子坐という二極化としての捉え方ではなく、床坐と椅子坐の併用に関する多様化として捉え直さなければならない。日本人がソファを好むのは、床坐の延長という意味も含めて

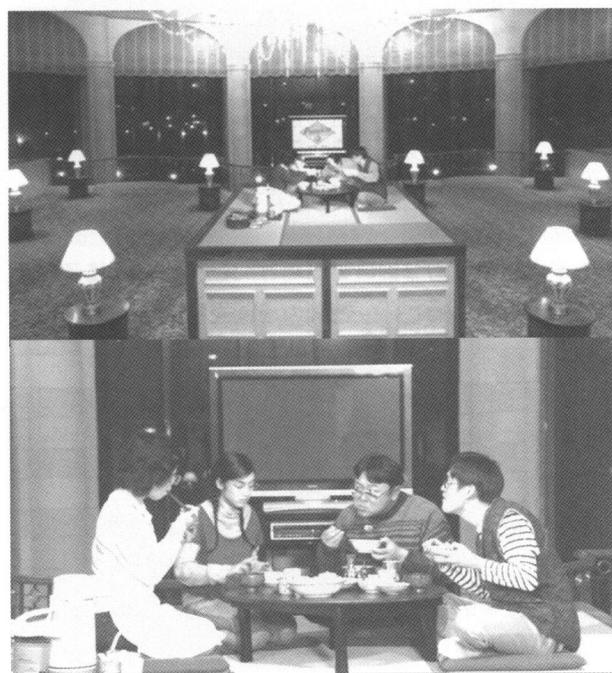


図52 床坐『笑う大天使』(2005年)

いるように感じる。「和室」とか「洋室」という既成概念で規定できないところに、日本の「床坐回帰現象」の本質があるように思えてならない。

5.3. 日本の起居様式に関する展望

図52⁶⁵⁾は2005年に製作された『笑う大天使』の場面である。原作がコミックなので、映像表現にもCGが多く、図52上の場面も非現実的なものである。仮想的な空間で食事をしている家族は成金で、外見は極めて立派な洋館に住んでいる。しかし、昔の貧乏だった生活を継承していて、室内では畳の上にちゃぶ台を置き、楽しい会話をしながら、図52下のように質素な食事をしている。このコミカルな象徴性は、現代の日本人が持つ感性をくすぐる効果がある。主演の上野樹里が大邸宅のディナーを前にして、おしんことアジの干物が食べたいとつぶやく場面も、同じ意味を重ねて設定しているのであろう。こうした場面は、日本の映画では古くから洋風化による日本の生活様式の喪失として、延々と継承されている。

日本を除けば、先進国における起居様式は、おおむね椅子坐を基調としている。日本の床坐は隣国である中国、朝鮮半島の影響を強く受けていることは周知の事実である。中国は漢代以降より椅子坐が進行し、唐代になると富裕層に定着する⁶⁶⁾。このことから日本は中国の唐代以降、かなり独自性の強い床坐を形成したことになる。

GHQの政策も手伝って、戦前の封建的な社会秩序を、戦後の映画では盛んに否定してきた。1946年に製作された『我が人生に悔いなし』では新しい農村への取り組み、1949年に製作された『青い山脈』では保守的な学校教育への批判、1952年に製作された『山びこ学校』では貧しい山村における教育の必要性が説かれた。これは社会制度の問題が中心であって、起居様式との関連性に関しては触れられていない。

戦後GHQの指導で、各県単位に生活改善運動が進められていく。座姿勢での作業を否定し、立姿勢での作業を奨励した。座姿勢による作業が科学的な合理性に欠けることは理解できるが、作業は起居様式の一部であって、生活全体における検討は行われていない。

戦後という視座で日本の起居様式の変遷を考えると、確かに自由な坐の文化が、都市を中心に形成されていることは間違いない。しかしながら、その自由さには功罪があり、現在、社会で希薄になっている集団でのマナーは、坐の文化が持っていた秩序観が喪失したことも一つの要因になっている。坐の実態は、時代の持つ精神と深く関係しており、また家庭におけるコミュニケーション

とも関係する。坐の形式は一律に展開する必要はないが、個人だけの価値観だけが先行すれば、単なる無秩序な生活文化に陥る危険性がある。

注

- 1) 西山卯三：日本のすまい I・II・III、勁草書房、1976
- 2) 沢田知子：ユカ坐・イス坐 起居様式にみる日本住宅のインテリア史、住まい学体系066、住まいの図書館出版局、1995
- 3) 映画の撮影は、実際の住宅を借りて行う場合と、スタジオ等でセットを組んで行う場合がある。1954年に成瀬巳喜男が監督した『山の音』は、原作者である川端康成の自宅を使用して撮影された。映画ではこうした事例も少なくはない。
- 4) 『男はつよよ』は1969年から製作が始まり、合計48作品が製作された。この全作品を用いると偏りが生じるので、14作品だけを使用した。『若大将シリーズ』『無責任男シリーズ』『社長シリーズ』に関しては、制限を加えなかった。『釣りバカ日誌シリーズ』に関しては、2000年以降の作品を割愛した。
- 5) 内閣府景気統計部では、1967年と1968年の2回しか調査を行っていない。
- 6) 石村眞一：まな板 ものと人間の文化史132、法政大学出版局、2006、pp. 164-165
- 7) 前掲6)：pp. 203-204 足付きまな板を床坐で使用している事例はないが、1952年に製作された『山びこ学校』では、囲炉裏の周囲に膳を使わない食事風景が示されている。また1957年に製作された『米』では、茨城県霞ヶ浦に隣接する農家で、箱膳が田植え後の祝い事をする席で使用されている。
- 8) 前掲2)：pp. 172-178
- 9) 前掲2)：p. 234
- 10) 小倉浩一郎1949年製作、松竹株式会社配給、松竹株式会社ビデオ事業室発売・販売元のDVDより引用
- 11) 藤森照信：昭和住宅物語、新建築社、1990、pp. 94-100
- 12) 小出孝1949年製作、松竹株式会社配給、松竹株式会社ビデオ事業室発売・販売元のDVDより引用
- 13) 前掲11)：pp. 206-216
- 14) 学童用の机、椅子に関しては、最初にコクヨ、イトーキ、クロガネ等のスチール家具メーカーが発売し、その後木製家具メーカーが追従する。すなわち、現在の木製家具としての学習セットの歴史は、おおむね1970年以降ということになる。カリモク家具販売株式会社よりご教示をいただく。
- 15) 玉置泰1987年製作、東宝株式会社配給、発売元ジェネオンエンタテインメントのDVDより引用
- 16) 玉置泰1988年製作、東宝株式会社配給、発売元ジェネオンエンタテインメントのDVDより引用
- 17) 永井正夫・原正人1997年製作、東映株式会社配給、角川映画株式会社発売・販売のDVDより引用
- 18) 銀のエンゼル製作委員会2004年製作、メディア・スーツ/プロダクションピクチャーズ配給、日活株式会社発売のDVDより引用
- 19) 一瀬隆重2004年製作、配給：TBS・Entertainment FARM・オズ・ジェネオンエンタテインメント・東宝株式会社・日活株式会社、ジェネオンエンタテインメント発売のDVDより引用
- 20) 若杉正明2006年製作、ピタズ・エンド配給、発売・販売元スタイルジャムのDVDより引用
- 21) 春名慶・甘木モリオ2008年製作、東宝株式会社配給、発売元ショウゲート・東宝 販売元東宝株式会社のDVDより引用
- 22) 佐藤直樹2008年製作、日活株式会社配給、日活株式会社発売元・販

売元のDVDより引用

- 23) 本木荘二郎1948年製作, 東宝株式会社配給, 発売元東宝株式会社のDVDより引用
- 24) 児井英生1949年製作, 新東宝株式会社配給, (有) ケー・アイ・コーポレーション発売のDVDより引用
- 25) 山本武1949年製作, 松竹株式会社配給, 松竹株式会社発売・販売のDVDより引用
- 26) 藤本真澄1951年製作, 東宝株式会社配給, 発売元東宝株式会社のDVDより引用
- 27) 児井英生1951年製作, 東宝株式会社配給, 発売元東宝株式会社のDVDより引用
- 28) 本木荘二郎1952年製作, 東宝株式会社配給, 発売元東宝株式会社のDVDより引用
- 29) 桑田良太郎1959年製作, 松竹株式会社配給, 松竹株式会社ビデオ事業室発売・販売元のDVDより引用
- 30) 杉原貞雄・福島通人1955年製作, 東宝株式会社配給, 発売元東宝株式会社のDVDより引用
- 31) 坂上静翁1956年製作, 日活株式会社配給・日活株式会社発売元・販売元のDVDより引用
- 32) 佐藤一郎・金原文雄1961年製作, 東宝株式会社配給, 発売元東宝株式会社 製作東京映画のDVDより引用
- 33) 脇田茂1963年製作, 松竹株式会社配給, 松竹株式会社ビデオ事業室発売・販売元のDVDより引用
- 34) 小松秀雄1960年製作, 松竹株式会社配給, 松竹株式会社ビデオ事業室発売・販売元のDVDより引用
- 35) 杉崎重美1968年製作, 松竹株式会社配給, 松竹株式会社ビデオ事業室発売・販売元のDVDより引用
- 36) 1966年製作, 日活株式会社配給, 日活株式会社発売元・販売元のDVDより引用
- 37) 佐々木孟1965年製作, 松竹株式会社配給, 松竹株式会社ビデオ事業室発売・販売元のDVDより引用
- 38) 石村眞一: 元気のある商店街の形成 千林商店街とその周辺, 東方出版, 2004, pp. 162-165
- 39) 藤岡豊・川野泰彦1974年製作, 東宝株式会社・国際放映株式会社配給, 発売元東宝株式会社のDVDより引用
- 40) 三嶋与四治1970年製作, 松竹株式会社配給, 松竹株式会社ビデオ事業室発売・販売元のDVDより引用
- 41) 樋口清1973年製作, 松竹株式会社配給, 松竹株式会社ビデオ事業室発売・販売元のDVDより引用
- 42) 島津清・名島徹1975年製作, 松竹株式会社配給, 松竹株式会社ビデオ事業室発売・販売元のDVDより引用
- 43) 佐藤一郎・市川喜一・宮古とく子1976年製作, 東宝株式会社配給, 発売元東宝株式会社のDVDより引用
- 44) 堀威夫・笹井英男1979年製作, 東宝株式会社配給, 発売元東宝株式会社・販売元東芝EMI株式会社のDVDより引用
- 45) 角川春樹1982年製作, 松竹株式会社配給, 松竹株式会社ビデオ事業室発売・販売元のDVDより引用
- 46) 正座の成立にはいくつかの説がある。江戸幕藩体制で武士の作法として始まり, 民間もその作法に習ったというのも一つの説である。また逆に, 江戸期以前から自然発生的に存在していたという解釈もある。筆者の中央アジアでの調査では, イスラム文化において正座は相手に服従する姿勢であり, 16世紀の絵画資料にも認められる。この場合の正座は, 対する相手が椅子坐であり, 必ずしも床坐文化での姿勢とは限らない。
- 47) 角川春樹1983年製作, 東映株式会社配給, 発売元角川映画株式会社・販売元株式会社角川エンタテインメントのDVDより引用
- 48) 島津清・佐生哲雄製作, 松竹株式会社配給, 松竹株式会社映像商品部発売・販売元のDVDより引用
- 49) 角川春樹1986年製作, 角川春樹事務所配給, 発売元角川映画株式会社, 発売元角川エンタテインメントのDVDより引用
- 50) 角川春樹1987年製作, 東宝株式会社配給, 発売元角川映画株式会社・販売元株式会社角川エンタテインメントのDVDより引用
- 51) 市村朝一1989年製作, 東宝株式会社 プルミエ・インターナショナル配給, 発売元東宝株式会社のDVDより引用
- 52) 三ツ井康・村上光一1990年製作, 東映株式会社配給, 発売元フジテレビジョン・販売元ポニーキャニオンのDVDより引用
- 53) 小島吉引1992年製作, 東映株式会社配給, 発売元東映株式会社・東映株式会社販売のDVDより引用
- 54) 櫻井洋三1994年製作, 松竹株式会社配給, 松竹株式会社ビデオ事業室発売・販売元のDVDより引用
- 55) シネカノン・東宝・日活・ポニーキャニオン1998年製作, シネカノン配給, (株)ポニーキャニオン発売・販売元のDVDより引用
- 56) 岩沢清・井上弘道・長尾直樹・岡本東郎1997年製作・パップ配給, 発売元株式会社パップのDVDより引用
- 57) 中川滋弘1995年製作, 松竹株式会社配給, 松竹株式会社映像商品部発売・販売元のDVDより引用
- 58) 宮内正喜・高井英幸2001年製作・東宝株式会社配給, 発売元フジテレビ 東宝/販売元東宝のDVDより引用
- 59) 黒井和男2004年製作, 角川映画 エンジェル・シネマ配給, 発売元角川映画 ハビネット・ビクチャーズのDVDより引用
- 60) 春日たかし・酒井治盛・竹中功・張江肇2003年製作, バル企画配給, ブロードウェイ発売・販売元のDVDより引用
- 61) トライネットエンタテインメント・JVCエンタテインメント・スローラーナー2007年製作, スローラーナー配給, ブロードウェイ発売・販売元のDVDより引用
- 62) 島谷能成・関一由・細野義朗・安永義郎2005年製作, 東宝株式会社配給, 発売元博報堂DYメディアパートナーズ/販売元東宝のDVDより引用
- 63) 島谷能成・信国一郎・亀井修・安永義朗・久安学・原裕二郎・井上良次・沢井和則2007年製作, 東宝株式会社配給, 発売元博報堂DYメディアパートナーズ・小学館(911122)/販売元東宝のDVDより引用
- 64) 積水ハウス株式会社ブラン分析調査を参考とする。
- 65) ミコット・エンド・バサラ ジェネオンエンタテインメント ナイス・デー2005年製作, アルパトロス・フィルム配給, ジェネオンエンタテインメント株式会社発売元のDVDより引用
- 66) 前掲6) : p. 34

資料1 使用した映画一覧及び坐の区分 - 1

No.	製作年	映画の名称	床坐	椅子坐	床坐と椅子坐の併用
1	1947年	素晴らしき日曜日	1	—	—
2	1947年	安城家の舞踏會	—	—	1
3	1947年	長屋紳士録	2	—	1
4	1948年	夜の女たち	2	—	1
5	1948年	酔いどれ天使	3	—	1
6	1948年	風の中の牝雞	2	—	2
7	1949年	お嬢さん乾杯	—	1	1
8	1949年	野良犬	3	—	—
9	1949年	晩春	—	—	2
10	1949年	青い山脈	2	—	—
11	1949年	破れ太鼓	—	2	—
12	1949年	湯の町悲歌	1	1	—
13	1949年	男の涙	1	—	1
14	1949年	異国の丘	—	—	1
15	1950年	醜聞スキャンダル	1	—	—
16	1950年	宗方姉妹	1	—	1
17	1951年	めし	5	—	—
18	1951年	麦秋	—	—	2
19	1951年	白痴	—	1	1
20	1951年	カルメン故郷に帰る	1	—	—
21	1951年	武藏野夫人	—	1	1
22	1951年	愛妻物語	2	—	1
23	1951年	高原の駅よさようなら	—	1	—
24	1952年	生きる	1	—	1
25	1952年	原爆の子	2	—	—
26	1952年	お茶漬の味	—	—	1
27	1952年	風の噂のリル リルを探してくれないか	1	—	—
28	1952年	巣鴨の母	2	—	—
29	1953年	君の名は「第一部」	3	—	1
30	1953年	東京物語	4	—	1
31	1953年	煙突の見える場所	2	—	—
32	1953年	縮図	2	—	1
33	1953年	君の名は「第二部」	—	1	—
34	1954年	二十四の瞳	1	—	—
35	1954年	山の音	1	—	—
36	1954年	女の園	4	—	1
37	1954年	噂の女	—	—	1
38	1954年	どぶ	1	—	—
39	1954年	ともしび	1	—	—
40	1955年	愛のお荷物	1	—	1
41	1955年	あした来る人	—	—	2
42	1955年	浮雲	2	1	1
43	1955年	銀座二十四帖	1	—	—
44	1955年	歌え 青春はりきり娘	1	—	—
45	1955年	夫婦善哉	2	—	—
46	1955年	ジャンケン娘	—	1	1

使用した映画一覧及び坐の区分 - 2

No.	製作年	映画の名称	床坐	椅子坐	床坐と椅子坐の併用
47	1955年	警察日記	2	—	—
48	1955年	生きものの記録	—	—	3
49	1956年	赤信号	1	—	—
50	1956年	風船	—	1	3
51	1956年	飢える魂	1	1	1
52	1956年	神阪四郎の犯罪	—	1	—
53	1956年	ロマンス娘	—	1	1
54	1956年	早春	3	—	—
55	1956年	流れる	2	—	—
56	1956年	思い出月夜	—	—	1
57	1957年	大当り三色娘	—	2	1
58	1957年	東京暮色	1	—	—
59	1957年	喜びも悲しみも幾歳月	2	—	1
60	1957年	永すぎた春	1	1	—
61	1957年	満員電車	2	—	—
62	1957年	くちづけ	1	1	—
63	1958年	張込み	2	—	—
64	1958年	駅前旅館	—	—	1
65	1958年	彼岸花	—	—	3
66	1958年	眼の壁	—	—	1
67	1958年	暖簾	—	—	1
68	1959年	朝を呼ぶ口笛	1	—	—
69	1959年	貸間あり	2	2	3
70	1959年	お早よう	4	—	1
71	1959年	愛と希望の街	1	1	—
72	1959年	社長太平記	1	—	1
73	1959年	人間の壁	2	1	—
74	1959年	あなたと私の合言葉 さようなら、今日は Goodbye, Hello	—	—	2
75	1960年	悪い奴ほどよく眠る	—	1	—
76	1960年	ろくでなし	—	2	1
77	1960年	女が階段を上る時	1	1	1
78	1960年	豚と軍艦	2	2	1
79	1960年	娘・妻・母	—	1	1
80	1960年	秋日和	—	—	2
81	1960年	サラリーマン忠臣蔵	1	—	1
82	1960年	波の塔	1	2	2
83	1960年	青春残酷物語	2	1	—
84	1960年	裸の島	1	—	—
85	1961年	甘い夜の果て	1	1	—
86	1961年	名もなし貧しく美しく	1	1	—
87	1961年	ゼロの焦点	5	1	1
88	1961年	小早川家の秋	1	—	2
89	1961年	社長道中記	1	1	—
90	1961年	二階の他人	—	—	3
91	1961年	喜劇 駅前弁当	1	1	—

使用した映画一覧及び坐の区分 - 2

No.	製作年	映画の名称	床坐	椅子坐	床坐と椅子坐の併用
47	1955年	警察日記	2	—	—
48	1955年	生きものの記録	—	—	3
49	1956年	赤信号	1	—	—
50	1956年	風船	—	1	3
51	1956年	飢える魂	1	1	1
52	1956年	神阪四郎の犯罪	—	1	—
53	1956年	ロマンス娘	—	1	1
54	1956年	早春	3	—	—
55	1956年	流れる	2	—	—
56	1956年	思い出月夜	—	—	1
57	1957年	大当り三色娘	—	2	1
58	1957年	東京暮色	1	—	—
59	1957年	喜びも悲しみも幾歳月	2	—	1
60	1957年	永すぎた春	1	1	—
61	1957年	満員電車	2	—	—
62	1957年	くちづけ	1	1	—
63	1958年	張込み	2	—	—
64	1958年	駅前旅館	—	—	1
65	1958年	彼岸花	—	—	3
66	1958年	眼の壁	—	—	1
67	1958年	暖簾	—	—	1
68	1959年	朝を呼ぶ口笛	1	—	—
69	1959年	貸間あり	2	2	3
70	1959年	お早よう	4	—	1
71	1959年	愛と希望の街	1	1	—
72	1959年	社長太平記	1	—	1
73	1959年	人間の壁	2	1	—
74	1959年	あなたと私の合言葉 さようなら、今日は Goodbye, Hello	—	—	2
75	1960年	悪い奴ほどよく眠る	—	1	—
76	1960年	ろくでなし	—	2	1
77	1960年	女が階段を上る時	1	1	1
78	1960年	豚と軍艦	2	2	1
79	1960年	娘・妻・母	—	1	1
80	1960年	秋日和	—	—	2
81	1960年	サラリーマン忠臣蔵	1	—	1
82	1960年	波の塔	1	2	2
83	1960年	青春残酷物語	2	1	—
84	1960年	裸の島	1	—	—
85	1961年	甘い夜の果て	1	1	—
86	1961年	名もなし貧しく美しく	1	1	—
87	1961年	ゼロの焦点	5	1	1
88	1961年	小早川家の秋	1	—	2
89	1961年	社長道中記	1	1	—
90	1961年	二階の他人	—	—	3
91	1961年	喜劇 駅前弁当	1	1	—

使用した映画一覧及び坐の区分 — 3

No.	製作年	映画の名称	床坐	椅子坐	床坐と椅子坐の併用
92	1961年	大学の若大将	1	1	1
93	1962年	日本一の若大将	—	—	1
94	1962年	銀座の若大将	—	—	1
95	1962年	放浪記	1	1	—
96	1962年	ニッポン無責任時代	—	2	2
97	1962年	喜劇 駅前温泉	1	—	1
98	1962年	秋刀魚の味	1	—	3
99	1962年	キューボラのある街	2	—	—
100	1962年	秋津温泉	2	—	—
101	1962年	ニッポン無責任野郎	—	2	1
102	1962年	喜劇 駅前飯店	1	2	1
103	1963年	古都	—	—	1
104	1963年	つむじ風	2	2	—
105	1963年	嵐を呼ぶ十八人	1	—	1
106	1963年	ハワイの若大将	—	2	1
107	1963年	くたばれ！無責任	1	—	1
108	1963年	香港クレージー作戦	2	—	—
109	1963年	日本一の色男	2	2	2
110	1963年	江分利満氏の優雅な生活	1	—	1
111	1963年	下町の太陽	3	—	—
112	1963年	風の視線	—	2	1
113	1964年	日本一のホラ吹き男	1	3	—
114	1964年	愛と死をみつめて	2	—	—
115	1964年	月曜日のユカ	—	1	—
116	1964年	赤いハンカチ	—	2	—
117	1964年	三人よれば	1	—	2
118	1964年	肉体の門	1	—	—
119	1965年	日本一のゴマすり男	—	1	—
120	1965年	悦楽	—	—	1
121	1965年	海の若大将	—	—	2
122	1965年	エレキの若大将	—	—	2
123	1965年	美しさと哀しみと	—	—	2
124	1966年	白昼の通り魔	—	1	—
125	1966年	歌う若大将	—	1	1
126	1966年	アルプスの若大将	—	—	1
127	1966年	なつかしい風来坊	—	—	1
128	1966年	日本一のゴリガン男	—	1	1
129	1966年	愛と死の記録	3	—	—
130	1966年	哀愁の夜	1	1	—
131	1967年	レッツゴー！若大将	—	—	1
132	1967年	情炎	2	1	—
133	1967年	乱れ雲	1	—	2
134	1967年	炎と女	—	1	—
135	1967年	南太平洋の若大将	—	—	1
136	1967年	クレージー黄金作戦	1	—	1

使用した映画一覧及び坐の区分 - 4

No.	製作年	映画の名称	床坐	椅子坐	床坐と椅子坐の併用
137	1967年	愛の讃歌	1	—	2
138	1967年	愛の湯き	—	—	1
139	1967年	ゴー!ゴー!若大将	—	—	1
140	1968年	吹けば飛ぶよな男だが	2	1	—
141	1968年	白昼堂々	2	—	2
142	1968年	クレージーメキシコ大作戦	—	1	—
143	1968年	リオの若大将	—	—	1
144	1969年	ニュージーランドの若大将	1	1	—
145	1969年	でっかいでっかい野郎	—	—	4
146	1969年	フレッシュマン若大将	1	2	1
147	1969年	女は度胸	—	—	1
148	1969年	男はつらいよ	—	—	1
149	1970年	影の車	—	1	1
150	1970年	家族	2	—	2
151	1970年	君が若者なら	—	—	1
152	1971年	八月の濡れた砂	—	1	2
153	1971年	内海の輪	1	1	1
154	1971年	若大将対青大将	—	—	1
155	1971年	男はつらいよ 純情篇	1	—	3
156	1971年	樹氷悲歌	1	—	1
157	1972年	故郷	1	—	—
158	1972年	黒の奔流	1	1	—
159	1972年	忍ぶ川	3	—	—
160	1973年	恍惚の人	1	—	—
161	1973年	同棲時代	—	—	1
162	1973年	化石の森	—	1	3
163	1973年	男はつらいよ 寅次郎忘れな草	—	—	3
164	1974年	神田川	1	—	1
165	1974年	妹	—	—	2
166	1974年	赤ちょうちん	1	—	3
167	1974年	バージンブルース	2	—	1
168	1974年	あばよダチ公	1	—	1
169	1974年	わが道	1	—	—
170	1975年	友情	2	—	—
171	1975年	告訴せず	—	—	1
172	1975年	同胞	1	—	1
173	1975年	球形の荒野	1	—	—
174	1975年	祭りの準備	6	—	1
175	1975年	男はつらいよ 寅次郎相合い傘	—	—	3
176	1976年	不毛地帯	2	2	1
177	1976年	エデンの海	2	—	—
178	1977年	幸福の黄色いハンカチ	3	—	—
179	1977年	男はつらいよ 寅次郎と殿様	—	—	3
180	1978年	帰らざる日々	2	—	1
181	1979年	十八歳、海へ	—	—	3
182	1979年	天使を誘惑	—	—	2

使用した映画一覧及び坐の区分 - 5

No.	製作年	映画の名称	床坐	椅子坐	床坐と椅子坐の併用
183	1979年	配達されない三通の手紙	1	—	2
184	1979年	ホワイト・ラブ	—	1	1
185	1979年	男はつらいよ 寅次郎春の夢	—	—	3
186	1980年	四季 奈津子	1	—	1
187	1981年	風の歌を聴け	—	1	1
188	1981年	駅 STATION	3	1	—
189	1981年	遠雷	1	—	1
190	1981年	男はつらいよ 浪花の恋の寅次郎	—	—	3
191	1981年	ガキ帝国	1	—	—
192	1982年	転校生	—	1	1
193	1982年	海峡	3	—	2
194	1982年	蒲田進行曲	1	1	1
195	1983年	アイコ十六歳	—	—	1
196	1983年	時代屋の女房	1	1	2
197	1983年	探偵物語	—	1	1
198	1983年	家族ゲーム	1	1	—
199	1983年	魚影の群れ	1	—	1
200	1983年	男はつらいよ 口笛を吹く寅次郎	1	—	3
201	1983年	十階のモスキート	1	1	—
202	1984年	愛情物語	—	1	1
203	1984年	Wの悲劇	—	—	2
204	1985年	早春物語	—	—	1
205	1985年	さびしんぼう	—	—	1
206	1985年	友よ、静かに眠れ	—	1	—
207	1985年	男はつらいよ 柴又より愛をこめて	1	—	2
208	1986年	恋する女たち	—	1	1
209	1986年	ボクの女に手を出すな	—	2	3
210	1986年	彼のオートバイ 彼女の島	1	—	1
211	1987年	恋人たちの時刻	—	1	1
212	1987年	私をスキーに連れてって	—	1	—
213	1987年	トットチャンネル	—	1	—
214	1987年	マルサの女	—	—	4
215	1987年	男はつらいよ 知床慕情	—	—	2
216	1988年	釣りバカ日誌	—	—	3
217	1988年	マルサの女 2	—	1	2
218	1989年	釣りバカ日誌 2	—	1	1
219	1989年	彼女が水着にきがえたら	—	1	—
220	1989年	君は僕をスキになる	—	—	1
221	1989年	男はつらいよ ぼくの伯父さん	—	—	3
222	1990年	バタアシ金魚	—	1	1
223	1990年	釣りバカ日誌 3	—	—	1
224	1990年	病院へ行こう	1	1	1
225	1991年	男はつらいよ 寅次郎の告白	1	1	2
226	1991年	釣りバカ日誌 4	—	—	1
227	1991年	あいつ	—	—	2
228	1992年	三月のライオン	—	1	1

使用した映画一覧及び坐の区分 - 6

No.	製作年	映画の名称	床坐	椅子坐	床坐と椅子坐の併用
229	1992年	私を抱いてそしてキスして	—	3	—
230	1992年	釣りバカ日誌 5	—	—	1
231	1992年	シコ ふんじゃった	1	—	1
232	1992年	はるか ノスタルジィ	1	—	1
233	1992年	男はつらいよ 寅次郎の青春	1	—	3
234	1993年	釣りバカ日誌 6	—	—	2
235	1993年	男はつらいよ 寅次郎の縁談	—	—	3
236	1994年	集団左遷	—	—	1
237	1994年	釣りバカ日誌 7	1	1	1
238	1994年	男はつらいよ 拝啓寅次郎様	—	—	4
239	1995年	渚のシンドバッド	1	2	—
240	1995年	男はつらいよ 寅次郎紅の花	—	—	3
241	1996年	釣りバカ日誌 8	1	2	1
242	1997年	20世紀ノスタルジア	—	1	1
243	1997年	鉄塔 武蔵野線	1	1	1
244	1997年	東京日和	—	—	1
245	1997年	釣りバカ日誌 9	—	1	1
246	1997年	失樂園	—	2	2
247	1998年	がんばっていきまっしょい	—	—	1
248	1998年	のど自慢	1	—	1
249	1998年	釣りバカ日誌 10	—	—	2
250	1998年	時雨の記	—	1	1
251	1999年	菊次郎の夏	—	—	1
252	1999年	洗濯機は俺にまかせろ	2	2	1
253	1999年	どんてん生活	1	—	—
254	1999年	あの、夏の日 とんでろ じいちゃん	—	1	1
255	1999年	生きたい	1	—	—
256	1999年	鉄道員	3	—	—
257	2000年	天国までの百マイル	1	—	—
258	2000年	ガラスの脳	1	1	1
259	2000年	秘密	—	—	2
260	2001年	赤い橋の下のぬるい水	1	—	3
261	2001年	みんなのいえ	1	2	—
262	2001年	釣りバカ日誌12	—	—	1
263	2001年	歩く、人	1	—	1
264	2001年	日本の黒い夏「冤罪」	—	—	1
265	2002年	仄暗い水の底から	—	1	—
266	2002年	うつつ	—	1	—
267	2002年	折り梅	—	1	1
268	2002年	東京原発	—	1	—
269	2002年	木曜組曲	—	—	1
270	2003年	AIKI	—	—	1
271	2003年	blue	—	—	2
272	2003年	ミラーを拭く男	1	—	2
273	2003年	バーバー吉野	—	1	1
274	2004年	隣人13号	—	—	2

使用した映画一覧及び坐の区分 - 7

No.	製作年	映画の名称	床坐	椅子坐	床坐と椅子坐の併用
275	2004年	インストール	—	1	1
276	2004年	いぬのえいが	—	—	1
277	2004年	予言	—	—	4
278	2004年	銀のエンゼル	—	1	1
279	2004年	花とアリス	—	1	1
280	2005年	電車男	—	3	1
281	2005年	笑う大天使	3	1	—
282	2006年	探偵事務所5 探偵591「楽園」	—	1	—
283	2006年	手紙	2	1	3
284	2006年	蛇イチゴ	—	—	1
285	2006年	ハチミツとクローバー	—	—	1
286	2006年	酒井家のしあわせ	2	—	2
287	2006年	博士の愛した数式	—	1	1
288	2006年	かぞくのひけつ	—	1	1
289	2007年	めがね	—	—	1
290	2007年	あしたの私のつくり方	—	1	1
291	2007年	奈緒子	—	1	—
292	2007年	そのときは彼によろしく	—	—	3
293	2007年	クローズド・ノート	—	1	3
294	2007年	赤い文化住宅の初子	1	1	—
295	2007年	東京タワー オカンとボクと、時々、オトン	1	1	2
296	2007年	バッテリー	—	1	1
297	2007年	恋するマドリ	—	—	2
298	2007年	サイドカーに犬	—	—	2
299	2007年	天然コケッコー	—	—	1
300	2007年	歌謡曲だよ、人生は	1	—	2
301	2008年	ブタがいた教室	1	2	2
302	2008年	うた魂	—	1	—
303	2008年	築地魚河岸三代目	—	—	1